

研究集会 「古代東北出土の施釉陶磁器」

主催：東北古代土器研究会 共催：東北大学埋蔵文化財調査室

日時／令和7年8月30・31日（土・日）

会場／東北大学片平さくらホール（宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1）

プログラム

8月30日（土）

開 場）

13:00 ~

開会・趣旨説明）

13:30 ~ 13:40

基調講演）「日本古代における国産施釉陶器と舶載陶磁器

13:40 ~ 14:40

—東北地方を考える素材として—

大阪大学大学院人文研究科 高橋 照彦

—休憩—

14:40 ~ 14:50

報告1）「陸奥国中部の様相」

14:50 ~ 15:40

宮城県教育庁文化財課 高橋 透

報告2）「陸奥国北部の様相」

15:40 ~ 16:10

奥州市教育委員会 高橋 千晶

岩手県文化振興事業団 村田 淳

8月31日（日）

報告3）「陸奥国南部の様相」

9:30 ~ 10:00

須賀川市文化振興課 管野 和博

報告4）「出羽国南部の様相」

10:00 ~ 10:40

酒田市文化資料館 渡部 裕司

—休憩—

10:40 ~ 10:50

報告5）「出羽国北部の様相」

10:50 ~ 11:30

秋田市文化振興課 佐藤 桃子

弘田橋跡調査事務所 小山 美紀

報告6）「列島北端部の様相」

11:30 ~ 11:50

岩手県文化振興事業団 村田 淳

—昼食—

11:50 ~ 13:00

討 論）司会 東北大学埋蔵文化財調査室 館内 魁生

13:00 ~ 15:00

福島県文化振興財団 菅原 祥夫

閉 会）



原作者のクレジット（氏名、作品タイトルなど）を表示し、改変した場合には元の作品と同じCCライセンス（このライセンス）で公開することを主な条件に、営利目的での二次利用も許可されるCCライセンス。



【会場周辺図】

開催趣旨

本研究集は、新型コロナウイルス感染拡大によって中止となった2022年2月の第48回城柵官衙遺跡検討会の特集「城柵官衙遺跡と施軸陶磁器」をもとに、最新発掘調査成果を含め、東北古代土器研究会が主体となって改めて開催するものである。

第48回城柵官衙遺跡検討会は、資料集は刊行できたものの、新型コロナウイルスの感染急拡大により、検討会自体の開催は中止となった。しかし、発表者間では、発表や討論で補足説明等の必要な部分が多いと認識しており、資料集のみでなく改めて研究会を開催できるかどうか模索していた。その後、中止から3年が経ち、新型コロナウイルスをめぐる社会情勢も落ち着いたため、これまで東北各地の土器の検討を行ってきた東北古代土器研究会が主体となり、改めて実施することとなった。

なお、基調講演及び各報告の内容は、最新の発掘調査成果を含んでいるが、第48回城柵官衙遺跡検討会から大きな変更はないため、基本的にはその資料集を参考にいただき、今回は発表要旨をまとめるにとどめた。ただし、前回は城柵官衙遺跡がみられない列島北端の岩手県北部域から青森県域は対象外としていたが、今回は城柵官衙遺跡に限らず東北地方全体を含める視点から、それらの地域の発表を加えることとした。また、報告にあたっての詳しい産地や年代の比定は、各報告者に委ねているが、近年の緑釉・灰軸陶器、貿易陶磁の各編年の併行関係については、下記の表を参考にされたい。

(事務局 高橋透)

暦年代	貿易陶磁 太宰府市教委(2000)	山城・熊鷹産 高橋(2003)	尾張・東濃産 尾野(2003・2008)	緑釉産 井上(2015)	東濃産 山内(2008)	遠江・駿河産 鈴木(2014・2015)
850	白磁Ⅰ類	I	V 新	黒瀬14号式		I
900	A 越州系青磁Ⅰ・Ⅱ類	II 古 III 新	VI 古 新	黒瀬90号式	光ヶ丘1号式	II
950	長沙系青磁 黄釉彫彩・彫軸	I 古 II 新	IV 古 新	折戸53号式	大原2号式	III
1000	B 白磁Ⅱ類	III	V 中 新	東山72号式	虎溪山1号式	IV
1050	C 越州系青磁Ⅲ類		VI 古 中 新	百代寺式	丸石2号式 明和27号式 西坂1号式	V
1100						

各編年の併行関係

引用文献

- 井上喜久男 2015『瓷器』『愛知県史』別編 窯業Ⅰ 古代 接投系 愛知県
- 尾野善裕 2003『古代の尾張・美濃における緑釉陶器生産』『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム
- 尾野善裕 2008『古代灰軸陶器生産と来姓古窯群』『来姓古窯群』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第31集
- 鈴木敏則 2014『遠江における灰軸陶器編年の現状と課題』『灰軸陶器を考える—編年の現状と課題—』東海土器研究会
- 鈴木敏則 2015『宮口・清ヶ谷窯の灰軸陶器編年と地域性』『灰軸陶器生産における地方窯の成立と展開』第3回東海土器研究会
- 高橋照彦 2003『平安京近郊の緑釉陶器生産』『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会第7回シンポジウム
- 高橋照彦 2020『近江における緑釉陶器生産の再検討』『待兼山論叢』第54号 大阪大学大学院文学研究科
- 太宰府市教育委員会 2000『太宰府桑坊跡XV』太宰府市の文化財第49号
- 山内伸浩 2008『東濃地域における灰軸陶器・山茶碗生産の様相—窯の分布とその変遷の視点から—』『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』

発表要旨 目次

基調講演) 日本古代における国産施釉陶磁器と舶載陶磁器—東北地方を考える素材として—	1
大阪大学大学院人文学研究科 高橋照彦	
報告1) 陸奥国中部の様相	11
宮城県教育庁文化財課 高橋透	
報告2) 陸奥国北部の様相	15
奥州市教育委員会 高橋千晶・岩手県文化振興事業団 村田淳	
報告3) 陸奥国南部の様相	19
須賀川市文化振興課 菅野和博	
報告4) 出羽国南部の様相	23
酒田市文化資料館 渡部裕司	
報告5) 出羽国北部の様相	27
秋田市文化振興課 佐藤桃子・弘田柵跡調査事務所 小山美紀	
報告6) 列島北端部の様相	31
岩手県文化振興事業団 村田淳	
紙上報告) 山王遺跡千刈田地区出土施釉陶磁器の概要	35
多賀城市埋蔵文化財調査センター 小原駿平	
付図) 東北地方における古代の施釉陶磁器出土遺跡分布図	

1. 日本古代の各種の陶磁器

以下では、日本古代、とりわけ平安時代において国内で生産された施釉陶器と、海外から舶載された陶磁器類について、生産・流通・消費の概要を整理する。

平安時代の国産施釉陶器は、大きくは緑釉陶器と灰釉陶器に分かれる。緑釉陶器は800度前後の比較的低い温度で溶融する鉛釉が施されたもので、一方の灰釉陶器は1,100度を超えるような高温で溶融する植物灰をもとにした釉薬を施す製品である。緑釉陶器は原材料に鉛(丹)などが必要で、ミガキ調整や二度焼きの手間もかかることから灰釉陶器よりも高級品であり、陰刻の花文や特殊な器種は基本的に緑釉陶器である。

このほか奈良時代には奈良三彩が生産されており、白釉(透明釉)、緑釉、褐釉などの多彩釉を掛け分けている。奈良三彩は平安時代の緑釉陶器と同じ鉛釉であり、釉色だけをみれば、奈良三彩が平安時代頃には緑釉単彩化していくということになる。ただし、器形も生産量も大きく変化しており、奈良三彩は小壺など祭祀的な用途が基本とみられるのに対して、平安時代の施釉陶器は椀や皿などの実用の製品が基本となる。

これら国産陶器の生産に対して、海外からも陶磁器が舶載されている。11世紀後半以降には急増するが、それ以前でも平安時代以降に陶磁器の出土量が増加している。最も一般的なものは青磁と白磁である。

青磁は中国の浙江省、いわゆる越(州)窯系のものが大半で、越州窯系青磁Ⅱ類とされるやや粗雑な製品は、主に福建省あたりで生産されたものである。

一方の白磁については、Ⅰ類は河北省や河南省など華北産とみられ、邢(州)窯(・定窯)系ともされるものである。後にⅡ類などへ変化し、福建省などの華南産の白磁がもたらされるようになる。

このほかにも、黄釉褐彩など有名な湖南省の長沙窯系の製品も少量ながらもたらされており、一般に上記の越窯系や長沙窯系の青磁類と邢窯系の白磁は、初期貿易陶磁と呼ばれている。これら以外にも、8世紀よ

り華北産の鉛釉の三彩陶器なども搬入されている。

2. 施釉陶器の産地と全般的動向

次に、国内の施釉陶器生産をもう少し詳しく述べる。奈良三彩は、平城京や北郊の奈良山などでの生産と考えられるが、平安時代の緑釉陶器は、平安京の近郊、洛北などで始まり、9世紀初めには尾張の猿投や長門にも広がる(図1)。9世紀中頃には洛西や尾北に、9世紀末頃には丹波の篠や三河の二川、美濃の多治見、周防の銚子川周辺、10世紀には近江でも生産が開始し、徐々に生産地が拡散し、新興地が隆盛を遂げていく。

これに対して灰釉陶器は猿投窯で生産が開始され、後に東海の諸窯へと同心円的に広がっていき(図2)、10世紀以降は東濃が生産の中心地になる。

産地の識別は種々の点を考慮する必要があるが、緑釉陶器の場合、平安京近郊窯のものは初期や末期のものを除いて基本的には削り出し高台を持つ。その他の地域は貼り付け高台である。また、近江の典型的なものは、段を持つような独特の高台であるが、同種のものは二川や末期の篠などでも確認されているので、厳密な肉眼での識別は難しい。一方、東海と防長は同じ貼り付け高台だが、断面でみると器壁の中心部分が黒色や灰色になっているようなものが多い。

灰釉陶器は産地の峻別がかなり困難であるが、東濃はヌメットした良質の焼き上りのものが多いなど、産地によって胎土や焼き上がり傾向がある。

3. 施釉陶磁器の分類と変遷

平安時代の施釉陶器の主な器種は、椀皿類である。椀皿類の主な器形と変遷は図3～6の通りである。それ以外の特殊な器種は、図7に掲げる。

<平安京近郊窯> 前1期、8世紀末から9世紀初めには三彩も残るが、黄緑色釉が施された軟質の製品が主で、甕(風炉)、甗、羽釜、(釜)蓋、貼り付け高台の椀Xが焼かれる。ただし、都城周辺や寺院が分布の中心で、あまり流通はしていない。

Ⅰ期、9世紀前半には椀皿類を中心とする生産に

なり、以前よりも量産化していく。製品は軟陶で、円盤状の削り出し高台の椀・皿A類が主体である。II期の9世紀中頃には、須恵質の硬陶が出現して、蛇の目や輪状の高台も認められるようになる。A類のほかにC類やD類もみられ、二次焼成時も三叉トチンを用いなくなる。III期の9世紀後葉には、蛇の目や輪状の削り出し高台が主体で、E類が増加する。

IV期の10世紀前半になると、椀・皿E類がほとんどで、稜の不明瞭なものも多い。輪花も多く、篠製品では器壁が薄くなる。底部外面に施釉されていないものがほとんどになり、輪状の高台が主体となる。V期の10世紀後半には、高台の削り出しや製品のミガキが粗雑になり、法量が縮小する傾向にある。ただし、末段階頃には、洛北で東濃窯系、篠窯で東海や近江の系譜を引く製品の生産も行われている。

<東海> 前I期が猿投編年のO(折戸)10号窯式にほぼ相当し、いわゆる原始灰釉陶器が焼成されている段階で、緑釉陶器や人工施釉の灰釉陶器の成立以前とみられる。瓶類を中心に肩や口頭部などに降灰釉がかかり、暗赤褐色の色調のものが多い。

I期はK(黒佐)14号窯式に相当する。灰釉陶器は白色の色調になり、内面のみに全面に海鼠状の釉が認められ、三叉トチンによる重ね焼きがなされる。貼り付けの角高台で、口縁部が大きく外反する椀皿A類である。緑釉陶器では、A類の他に貼り付けの蛇の目高台のC類などもわずかながらみられる。この時期の緑釉陶器には精緻な陰刻花文が施されているが、類品の分布はきわめて限られる。

II期はK90号窯式でも古段階に相当する。灰釉陶器の椀皿類は直接の重ね焼きになり、底部内面の釉が施されなくなり、逆に体部外面に釉が施されるとともに、高台は断面形が鈎爪(三日月)形になる。椀Aは口縁端部の外反度が弱くなり、体部の内湾度も小さくなる。一方の緑釉陶器は、全面施釉で三叉トチンを用い続けるとともに、高台も輪高台のままである。ただし、やや幅広い輪高台を持つE類などが多く認められ、D類もごくわずかに生産される。III期はK90号窯式でも新段階、美濃の光ヶ丘1号窯式に相当する。灰釉陶器などはII期を継承するが、

高台が外面に稜を持つ典型的な形態が多い。緑釉陶器では、輪高台のE類が主体で、五輪花を持つF類も多くなり、陰刻花文は定型的なものになる。

IV期はO53号窯式、美濃の大原2号窯式に相当する。灰釉陶器は漬け掛けに変化し、椀Aの一方で深椀が登場する。緑釉陶器では、F類も残るが、新しい深椀系統の椀G・Hが主体となる。高台はやや高めめの輪高台である。V期はH(東山)72号窯式、美濃の虎溪山1号窯式にほぼ相当する。灰釉陶器は深椀が主体を占めるようになり、三角高台をもつ椀Bも出現する。緑釉陶器には、体部に押圧輪花を施す椀Iも登場し、全般にミガキや施釉が粗くなる。

<近江> I期は東海などのIV期、10世紀前半頃に相当する。この時期はF類が残るとともに、椀Gなどがみられ、東海とほとんど変わりが無い。

II期は東海などのV期、10世紀後半に当たる。区分不明瞭ながら椀G・H・Iなどがあり、緑釉専焼化する。高台部下端に段を有する有段高台が一般化し、古い段階は高台が細めであるが、徐々に高台が低く段も明瞭になる。底部外面の施釉も省略傾向にあり、器表面も基本的にミガキを施さない。

III期は東海のVI期、東濃の丸石2号窯式前後、11世紀初め頃に当たる。高台が三角形状をなすようになる。底部外面は施釉せず、焼きの甘いものが多い。

防長製品の変遷は省略するが、東海に準じる。

<輸入陶磁器> 主な器種とその大宰府分類を図8に掲げる。青磁は、9世紀には蛇の目高台の越磁I類が一般的で、北部九州ではやや粗雑なII類も存在する。他に分厚い蛇の目高台の長沙窯の椀などもある。9世紀後葉頃からは、輪高台状のI類が一般的で、10世紀後半には細く高い盤形高台などのIII類へと変化する。白磁はI類が9世紀には一般的だが、10世紀後半頃にはXI類と呼ばれる一群の白磁が新たに流入してくる。

4. 施釉陶磁器の流通と消費

製品の流通・消費をみていく(図9～14・表1)。奈良三彩や長岡京期前後の緑釉陶器はきわめて分布が限られ、寺院や祭祀遺跡などが多いが、東日本では堅穴建物などからも出土する。

9世紀前半には平安京近郊、洛北産の軟質で円盤状高台の緑釉陶器が少量ながらも全国に分布をみる。猿投産はきわめて少ない。その一方で、当該期の灰釉陶器は、洛北産緑釉陶器よりは多いようで、全国的に分布をみている。9世紀後半以降の東日本では、緑釉陶器において東海産が多く、平安京近郊産は2割以下になるのが一般的であり、遺跡の性格によっても異なるが、灰釉陶器は緑釉陶器よりも数倍程度とはるかに多量に出土するようになる。

10世紀後半頃になると、緑釉陶器では全国的に近江系製品の流通が増えるが、東日本では東海産緑釉陶器も少なくない。灰釉陶器は、10世紀以降は東濃産が増えるが、東日本でも産地を離れると流通量は減っていく傾向にあり、東海道諸国に顕著である。

中国陶磁器については、北部九州を除けば国産陶器よりもはるかに少ない。北部九州ではⅡ類の存在もあって青磁が多いが、他の地域では青磁と白磁ではそれほど量差がみられない。基本的には碗皿類で、他の器種はきわめて少量である。長沙窯製品の出土は非常に少ないが、水注の出土がやや目立つ。

消費様相では、平安期の国産の施釉陶器や中国陶磁器類は、明らかに国府周辺域での出土が突出する。郡衙での出土は多くはなく、拠点的な集落などでの出土が目立っている。なお参考までに、使用状況のわかる事例として薬師寺例(図15)を示す。

文献(史料1~6)によれば、元日節会などで緑釉陶器(青瓷)を酒杯に用い、歯固の儀式で緑釉陶器の供膳具が供されており、国府内でも同様の儀礼的な使用が想定される。また、嵯峨天皇の離宮である冷然院などでは、猿投産の高級緑釉陶器がまわって出土しており、詩宴などの饗宴の際に緑釉陶器が用いられていたと想定される。国司館など国府周辺域での有力者の間でも饗宴の道具や室内を飾るような調度品として施釉陶器類が用いられ、地方に赴任する国司を中心に都の文化が伝わるのであろう。

例えば、多賀城第92次調査で五万崎地区から出土した緑釉陶器には、猿投窯初期の陰刻花文を持つ稀少な優品がある。それと同一工人の作とみられる資料は、公卿・親王クラスの邸宅が広がる平安京右

京三条三坊の出土品に確認できるのみで、この種の製品を使用できる人物もきわめて限られるだろう。

先の緑釉陶器は、報告書でも指摘されている通り、本来は政庁周辺以外での陸奥国司にかかわる儀礼や饗宴での使用品だったにちがいない。それは猿投で生産が始まった弘仁6年(815)以降でも早い時期の製品のため、弘仁6年に陸奥守に任ぜられた小野岑守を介して搬入された可能性が最も高いだろう。

小野岑守は、吉野侯部等波瀾に俘囚を帰順させたことから、弘仁8年(817)に嵯峨天皇から賞賛の詔勅を受けている。さらに、岑守は大同5年(810)の嵯峨天皇が即位した際に侍読の役を務め、弘仁5年(814)成立の勅撰漢詩集『凌雲集』の編纂にも携わり、陸奥守に任ぜられる以前にも、嵯峨天皇に近く仕えて、唐風文化を先導する立場にいた。

そうすると、この岑守が平安京の最上級の唐風文化をもたらし、対蝦夷政策として利用する方向性も推進したのではないか。胆沢城や出羽国府などへの唐風器物の搬入につながったことも想像に難くない。ただし、10世紀頃になると必ずしも国府に限らない地域でも施釉陶器類の出土が目立つ。例えば城堀官衙も置かれない青森県でもわずかながらも施釉陶器類が出土する。貢馬などの見返りとして、施釉陶磁器を入手することもありえただろうし、国府以外の広い消費者層の需要も想定しておく必要がある。

古代東北の歴史復元のための一資料として、施釉陶磁器類が、さらに有効活用されることを願う。

主要引用・参考文献

- 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系
大西 直 2020「地方における白瓷生産拡散の実態と猿投系」『東海窯業史研究論集』Ⅲ、東海窯業史研究会
尾野善裕 2008「古代の灰釉陶器生産と来姓古窯群」『来姓古窯群研究』
豊田市教育委員会
高橋照彦 1994「東国の施釉陶器」『古代の土器研究—律令の土器模式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会
高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』岡崎社
高橋照彦 2001「地方官衙出土の平安時代の緑釉陶器」『考古学ジャーナル』475号

高橋照彦 2003『平安京近郊の緑釉陶器生産』『古代の土器研究—平安時代の緑釉陶器・生産地の様相を中心に—』古代の土器研究会

高橋照彦 2015『都と地方の土器』『官衙・集落と土器1』国立文化財機構奈良文化財研究所

高橋照彦 2018『東北地方北部出土の緑釉陶器とその歴史的背景』『尾駁の駒・牧の背景を探る』六一書房

高橋照彦 2020『近江における緑釉陶器生産の再検討』『待兼山論叢』第54号

高橋照彦 2021a『尾張・美濃の平安期施軸陶器生産をめぐる2、3の問題』『京都府埋蔵文化財論集』第8集

高橋照彦 2021b『平安時代における施軸陶器・須恵器の生産と流通—篠簞を中心に—』『考古学ジャーナル』761号

高橋照彦ほか 2024『篠簞群西山1号窯の研究』真福社

高橋照彦・館内魁生・福岡真貴子 2024『神ノ島出土奈良三彩小壺に関する基礎的再検討』『神ノ島研究』第10号

奈良国立文化財研究所 1987『薬師寺発掘調査報告』(奈良国立文化財研究所学報 45)

宮城県多賀城跡調査研究所 2019『多賀城跡』(宮城県多賀城跡調査研究所年報 2018)

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡X V—陶磁器分類編—』



図1 平安時代における緑釉陶器の主な産地

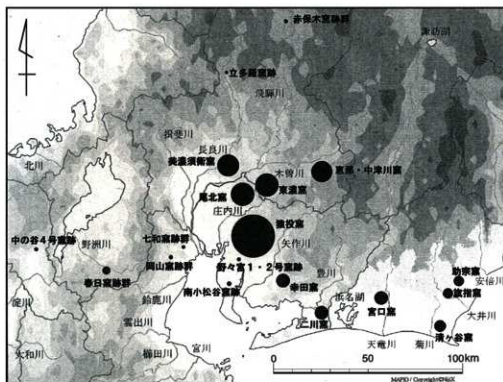


図2 平安時代における灰釉陶器の主な産地 (〔大西 2020〕を部分改変)

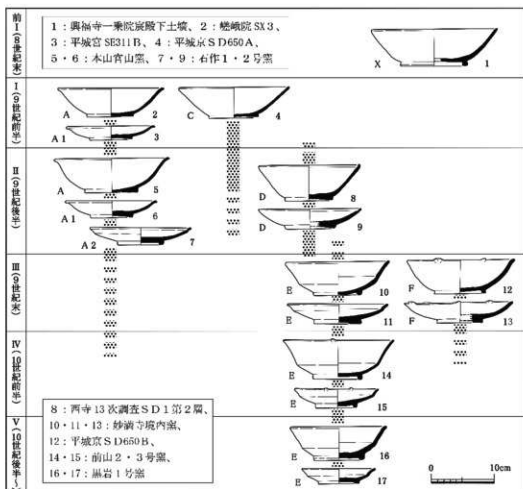


図3 平安京近郊窯における緑釉陶器碗皿類の変遷

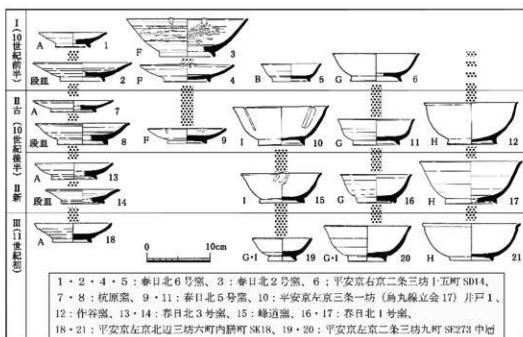


図4 近江における緑釉陶器碗皿類の変遷

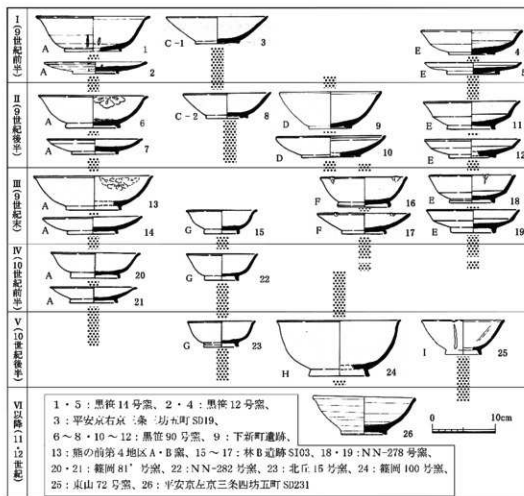


図5 東海地域における緑釉陶器碗皿類の変遷

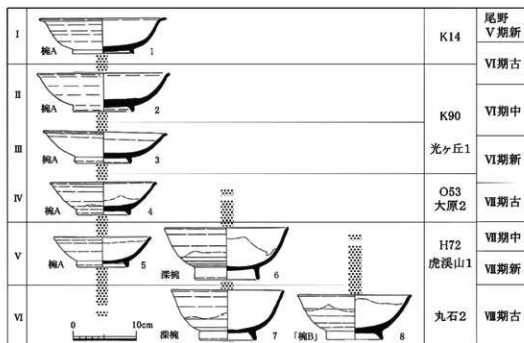
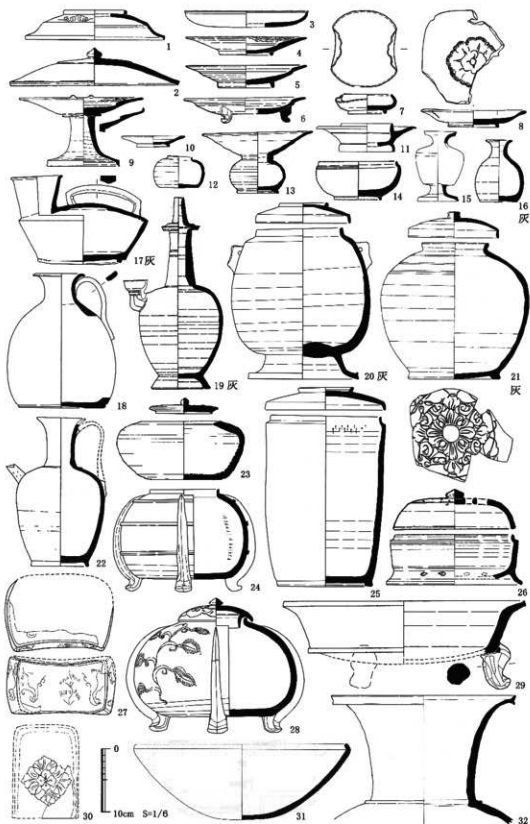
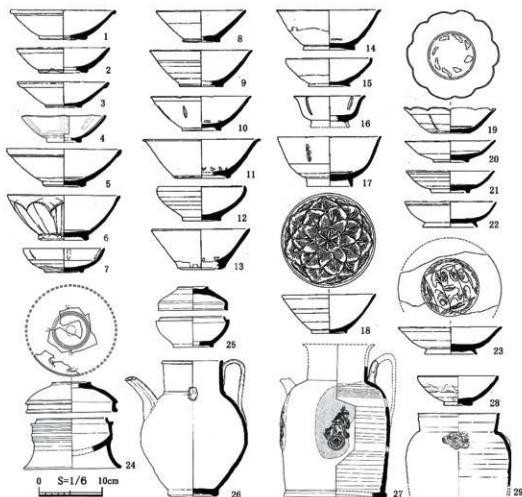


図6 東海地域における灰釉陶器碗類の変遷（〔尾野 2008〕を改変して作成）



1・2:蓋、3:皿、4・5:段皿、6:三足盤、7:耳皿、8:角皿、9:高杯、10・11:托、12・21:短頸壺、13:唾壺、14:合子、15:華瓶、16:小瓶、17:平瓶、18:手付瓶、19:淨瓶、20:双耳壺、22:水注、23:無頸壺、24・28:四足壺、25:筒形容器(「経筒」)、26:香炉、27:枕、29:火舍(獸脚は合成)、30:風字碇、31:鉢、32:広口壺 灰は灰釉、他は緑釉

図7 平安前・中期における国産施釉陶器の主な特殊器種



白磁—1: 碗Ⅰ-1、2: 碗Ⅰ-2a、3: 碗Ⅰ-4、4: 碗Ⅰ-5?、5: 碗Ⅰ-1、6: 碗Ⅰ-4、7: 皿Ⅰ-3、
越州窯系青磁—8: 碗Ⅰ-1a、9: 碗Ⅰ-1b(1)、10: 碗Ⅰ-2b?、11: 碗Ⅰ-2a?、12: 碗Ⅰ-3、13: 碗Ⅰ-5、
14: 碗Ⅱ-2c、15: 碗Ⅱ-2d、16: 小碗Ⅰ-2b才A、17: 碗Ⅲ-1b、18: 碗Ⅲ-2b、19: 坏Ⅰ-2A、
20: 皿Ⅰ-1b、21: 皿Ⅰ-2、22: 皿Ⅲ-1a、23: 浅形(型)碗×皿Ⅲ-3b、24: 香炉、25: 合子、26: 水注、
長沙窯系黄釉褐彩・青磁—27: 水注、28: 碗、29: 壺

図8 平安前・中期における中国陶磁器の主な器種

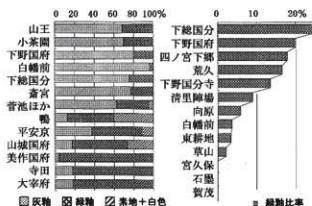


図9 消費地各地における灰釉陶器と緑釉陶器の比率

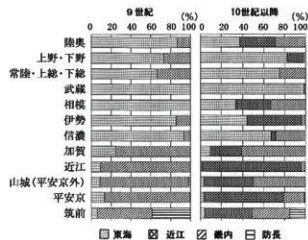


図10 消費地における緑釉陶器の産地構成

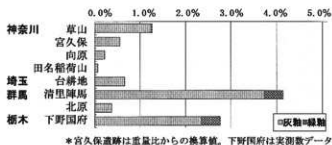


図 11 消費地各地の土器総破片数に占める
灰釉陶器・緑釉陶器の比率

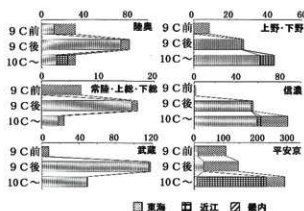


図 12 消費地各地における緑釉陶器の時期別変化

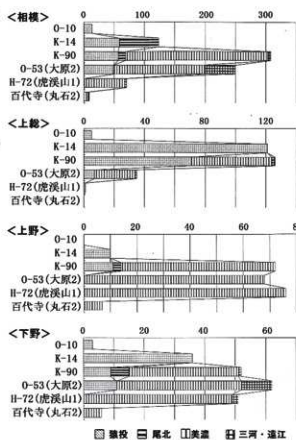


図 13 東国の消費地における灰釉陶器の時期別変化

表 1 消費地の性格差と調査面積あたりの緑釉陶器の出土点数

平安京 周辺	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉 陶器の出土点数	出雲 国府	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉 陶器の出土点数
平安宮内裏 (S K 25)	96点/45m ²	213.3点/100m ²	六所堀 (政庁)	20点/360m ²	5.6点/100m ²
藤原良相邸 (西三条堀)	52点/116m ²	44.8点/100m ²	宮の裏 (貴司)	71点/4,267m ²	1.7点/100m ²
南宮(伊勢直王) の邸宅	2,187点/7,556m ²	28.9点/100m ²	大倉原 (邸内堀)	36点/6,008m ²	0.6点/100m ²
左京二条 園坊十町	278点/4,000m ²	7.0点/100m ²	日原田 (丁堀など)	52点/1,490m ²	3.5点/100m ²
長岡京跡 右京第349次 (平安京外)	44点/2,650m ²	1.7点/100m ²	橘ノ門ほか (外堀区域)	0点/594m ²	0点/100m ²
神奈川遺跡 周辺	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉 陶器の出土点数	三田谷 I 遺跡	緑釉陶器の出土 点数と調査面積	100m ² あたりの緑釉 陶器の出土点数
昭和56年度 (正倉城)	0点/1,030m ²	0点/100m ²	94・95年度 調査区	3点/4,000m ²	0.075点/100m ²
昭和59年度 (鷹井城)	1点/1,700m ²	0.059点/100m ²	96・97年度 調査区	1点/14,000m ²	0.007点/100m ²
昭和60・61年度 (御家)	0点/1,550m ²	0点/100m ²	97・98年度 調査区	5点/8,950m ²	0.056点/100m ²
平成15年度 (堀辺遺跡)	1点/4,734m ²	0.021点/100m ²			
鹿島神宮 堀内	1点/787m ²	0.13点/100m ²			

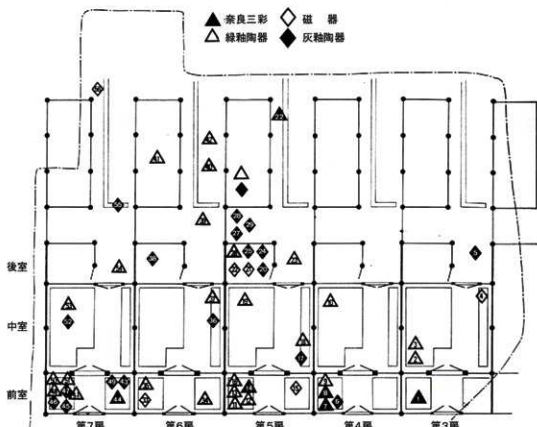


図 14 平城薬師寺西僧房における施釉陶磁器の出土地点 (前室が仏間、中室が僧の起居の間) (〔京文研 1987〕を一部改変)

史料 1 『江家次第』 巻第一 元日宴会
供三節御酒（三節御酒、三節御酒、三節御酒）

史料 2 『延喜内膳司式』

蘿蔔味噌漬萬種漬萬種完猪元并貼煮餅貼

煮餅七口高案一脚（一脚、一脚、一脚）

右從元日至子三日止供之

史料 3 『延喜内膳司式』

供御料雜器

朱漆臺盤四面（二面漆器、二面漆器）

黑漆臺盤二面（二面漆器）

金銀朱漆臺盤類

右供御雜器從藏人所請但尋常料

臺盤二面肥料油桶一丈五尺一寸隨

破損申官請受内藏家

史料 6 『延喜造酒司式』

諸節雜給酒器

四尺漆盤三圓一圓（朱漆酒海三口、一圓、一圓、一圓） 朱漆酒海三口（如盤、漆酒海、漆酒海、漆酒海） 漆酒海三口（如盤、漆酒海、漆酒海、漆酒海） 漆酒海三口（如盤、漆酒海、漆酒海、漆酒海）

銀杯三圓（一圓、一圓、一圓） 白銅提壺二口（五月、五月、五月） 白銅提壺二口（五月、五月、五月） 白銅提壺二口（五月、五月、五月）

大酒樽一合（一合、一合、一合） 中酒樽四口（五月、五月、五月、五月） 中酒樽四口（五月、五月、五月、五月） 中酒樽四口（五月、五月、五月、五月）

尺棊二圓（一圓、一圓） 布畫代二圓（一圓、一圓） 布畫代二圓（一圓、一圓） 布畫代二圓（一圓、一圓）

右五位已上料其日正給空齋釋奠日空齋亦同

四尺漆盤一面朱漆酒海一口（一圓、一圓） 漆二枚（一圓、一圓） 五寸筵四枚銀漆一枚（一圓、一圓） 金銀兩筵一口（一圓、一圓） 提盤一口（一圓、一圓）

口四尺筵四圓風爐一具（一圓、一圓）

右内命婦已上料並請内藏家事畢返上

史料 4 『西宮記』 卷一 正月上 御案事

内膳供御御厨大根煎串

刺押貼燒鳥等付連物所々々例云 正月元日

早朝供奉屠屠御膳事猪穴二盤一盤（一圓、一圓） 押貼一盤（一圓、一圓）

二盤（一圓、一圓） 煮餅貼一盤（一圓、一圓） 但御器受於内膳煮餅

四口

史料 5 『江家次第』 巻第八 乞巧奠

内藏家官持雜器異物候於仙華門外雜色以下傳

取供之

朱漆高机四脚立（上、上、上、上） 上（上、上、上、上） 其東南机

南妻居菓子等

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

一坏（一坏、一坏）

はじめに

本発表では陸奥国中部にあたる宮城県域で出土する施釉陶磁器について、最初に多賀城跡など城柵官衙遺跡、次にその他の遺跡の出土状況を整理し、全体の様相についてまとめる。

1. 多賀城跡

多賀城跡で出土する施釉陶磁器は、緑釉陶器が 1/4 程度と高い割合を示し、国府という性格を反映したものといえる(第1図)。また貿易陶磁が 60 点を超え(第1表)、東国の地方官衙でも有数の出土量である。

多賀城内における各地区の緑釉・灰釉陶器の割合や 100 m²あたりの破片数を見た場合(第1図)、地区ごとの偏差が大きい。これはそれぞれの地区の性格や使用形態の違いに起因していると考えられる。すなわち、政庁地区は儀礼や政務の場であり、土器そのものが廃棄されないうえ 100 m²あたりの破片数が少なく、9 世紀代に四面廂付建物が並び格式の高い空間であった六月坂地区も同様と考える。一方、政庁南面(城前官衙)地区(第4図)や東門・大畑地区は実務官衙であるため政庁地区などより 100 m²あたりの破片数が多く、また西門・五万崎地区は饗宴にかかわる施設が存在が想定されるため緑釉陶器主体で集中的に出土し、南辺西地区(第5図)は祭祀に関連して多数の施釉陶磁器が用いられたとみられる。

施釉陶磁器の時期について、A 期(9 世紀前半～中葉)から灰釉陶器を中心に出土がみられ、B 期(9 世紀後半～10 世紀前半)に出土量のピークを迎える。C 期(10 世紀前半～11 世紀初頭)は出土量が急減し、灰釉陶器よりも緑釉陶器の出土が多くなり、D 期(11 世紀前半～後半)は灰釉陶器のみで極めて少なくなる(第2・3図)。貿易陶磁は白磁Ⅰ類または越州窯系青磁Ⅰ類が主体である。

2. 山王遺跡・市川橋遺跡

多賀城跡の南面に位置し、方格地割が確認されている山王・市川橋遺跡では、報告されている資料だけでも

2,000 点以上の施釉陶磁器が出土しており、特に東西大路沿いの北1西7区、北1西3区、南1西2区で多数確認できる。なお、北1西7区出土する施釉陶磁器については、小原報告を参照されたい。

3. その他の城柵官衙遺跡

多賀城跡周辺を除く城柵官衙遺跡からは、施釉陶磁器の出土は非常に少なく、伊治城跡、宮沢遺跡、東山官衙遺跡、壇の越遺跡、三十三間堂官衙遺跡などで出土しているが、1～5 点程度である(第7図)。陸奥国分寺跡・国分尼寺跡でも出土はわずかであるが、陸奥国分寺跡から南へ約 2 km の若林城跡からは、金泥の付着した灰釉陶器皿が出土している。

4. 城柵官衙遺跡以外の遺跡

城柵官衙遺跡以外で施釉陶磁器が出土する遺跡は合計で 64 遺跡確認でき(第6図)、緑釉・灰釉陶器の両方が出土するのは 15 遺跡、緑釉陶器のみが 9 遺跡、灰釉陶器のみが 38 遺跡、青磁または白磁が出土するのは 2 遺跡である。県南部内陸、鳴瀬川周辺、名取川周辺で出土遺跡が多く確認できる。

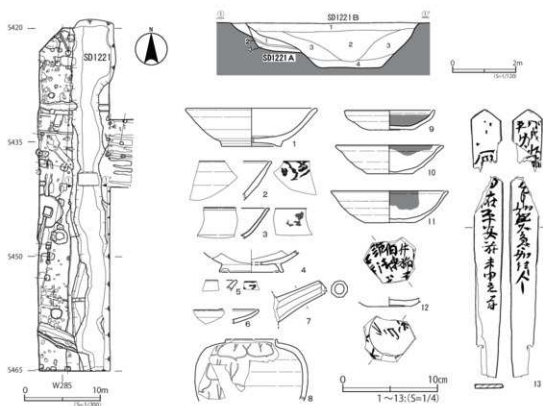
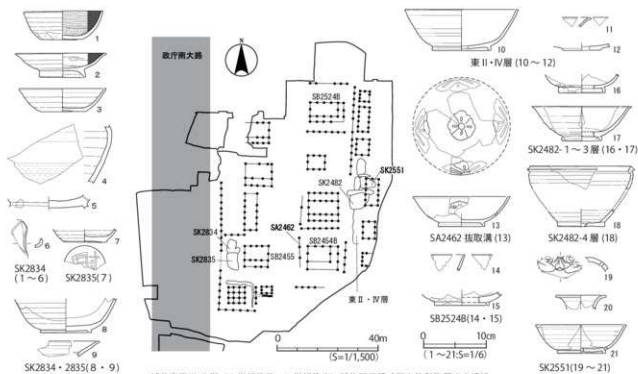
出土破片数では、中田南遺跡が 22 点と最も多く、10 点以上出土する遺跡には今市遺跡、安久東遺跡、梅ヶ久保遺跡がある。そのほか、郷楽遺跡では外面に陰刻花文の施される緑釉陶器瓶(第8図4)、一本柳遺跡で灰釉陶器水注(10)が出土し、いずれの遺跡も豪族居宅と推定されている(菅原 2007・2008)。

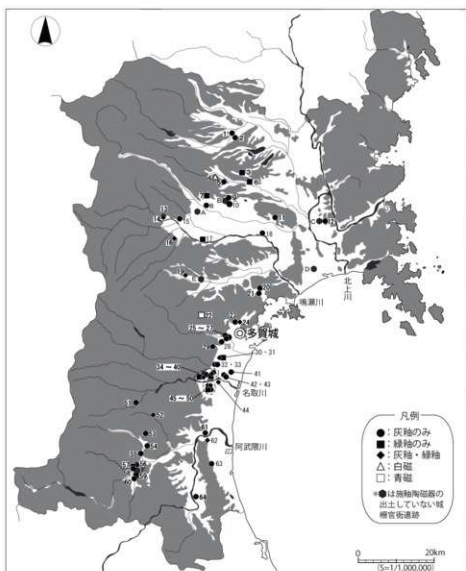
おわりに

陸奥国中部では、多賀城跡やその周辺で施釉陶磁器が多数出土し、地区ごとの偏差、特徴的な使用状況などが明らかとなった。一方、それ以外の城柵官衙遺跡では出土が極めて少なく、城柵官衙遺跡以外では県南部内陸部や主要河川周辺を中心に豪族居宅とみられる遺跡などで比較的多く出土する傾向が伺われた。

主要参考文献

宮城県多賀城跡調査研究所 2020『多賀城跡出土施釉陶磁器』

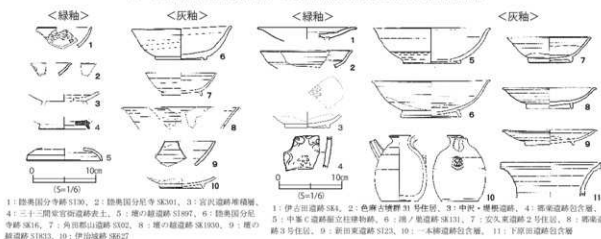




1: 伊田城跡, 2: 黒光遺跡, 3: かんじつ遺跡, 4: 西平取遺跡, 5: 経ヶ崎遺跡, 6: 下富前遺跡, 7: 宮沢遺跡, 8: 南小林遺跡, 9: 北小松遺跡, 10: 団子山西遺跡, 11: 黄金山南遺跡, 12: 新田東遺跡, 13: 東山官衙遺跡, 14: 堀の越遺跡, 15: 坂生遺跡, 16: 色麻古墳跡, 17: 中沢・堀越遺跡, 18: 一本郷遺跡, 19: 中津・A・C遺跡, 20: 聖山遺跡, 21: 小森遺跡, 22: 貞六郎遺跡, 23: 沢乙遺跡, 24: 馬家遺跡, 25: 堀ノ見遺跡, 26: 今市遺跡, 27: 笠沼中遺跡, 28: 燕沢遺跡, 29: 林江遺跡, 30: 陸奥国分寺跡, 31: 陸奥国分寺跡, 32: 南ノ見遺跡, 33: 若林城跡, 34: 山口遺跡, 35: 郡山遺跡, 36: 六反田遺跡, 37: 鯉治屋敷跡A遺跡, 38: 宮沢遺跡, 39: 元興・元興寺遺跡, 40: 伊古田遺跡, 41: 下飯田東遺跡, 42: 今泉城跡, 43: 今泉遺跡, 44: 中田遺跡, 45: 安久東遺跡, 46: 中田南遺跡, 47: 増穂遺跡, 48: 清水遺跡, 49: 八幡遺跡, 50: 町裏遺跡, 51: 二本松遺跡, 52: 南ヶ久保遺跡, 53: 戸の内遺跡, 54: 東山遺跡, 55: 下原田遺跡, 56: 家老内遺跡, 57: 明神堀遺跡, 58: 青木遺跡, 59: 蔵官衙遺跡, 60: 本郷遺跡, 61: 原遺跡, 62: 三十三間堂官衙遺跡, 63: 堀の内遺跡, 64: 角田郡山遺跡, A: 養生館官衙遺跡, B: 新田城跡, C: 松生城跡, D: 赤井官衙遺跡, E: 古岡官衙遺跡, F: 大御遺跡

第6図 陸奥国中部(宮城県域)における古代の施釉陶磁器出土遺跡

(1～64が施釉陶磁器出土遺跡、A～Fが施釉陶磁器の出土していない城衙官衙遺跡)



1: 陸奥国分寺跡 SK130, 2: 陸奥国分寺跡 SK301, 3: 宮沢遺跡南墳跡, 4: 三十三間堂官衙遺跡表土, 5: 堀の越遺跡 SK189, 6: 陸奥国分寺跡 SK16, 7: 角田郡山遺跡 SK02, 8: 堀の越遺跡 SK1830, 9: 堀の越遺跡 SK1833, 10: 伊田城跡 SK627

第7図 城衙官衙遺跡出土の施釉陶磁器

1: 伊古田遺跡 SK4, 2: 色麻古墳群 31号住居, 3: 中沢・堀越遺跡, 4: 馬家遺跡包含層, 5: 色麻古墳群 5号住居跡, 6: 南ノ見遺跡 SK1, 7: 安久東遺跡 2号住居, 8: 陸奥遺跡 3号住居, 9: 新田東遺跡 SK123, 10: 一本郷遺跡包含層, 11: 下原田遺跡包含層

第8図 城衙官衙遺跡以外の遺跡出土の施釉陶磁器

はじめに

岩手県は東北地方6県で最も施釉陶磁器の出土遺跡が多く、特に鎮守府である胆沢城跡では557点出土しており、これは国府多賀城跡に次ぐ。本稿前半では高橋が胆沢城跡、後半では村田が他の城柵遺跡及び伯濟寺遺跡を含む集落遺跡について分析した。

なお、本稿での時期区分は、A期を9世紀前半（猿投窯黒釉14号窯式併行期）、B期を9世紀後半（黒釉90号窯式併行期）、C期を10世紀前半（折戸53号窯式併行期）、D期を10世紀後半～11世紀（東山72号窯式～百代寺窯式併行期）とし、二つの時期に跨るものはB-C期等と表記した。

1. 胆沢城跡出土施釉陶磁器の概要

村田による施釉陶磁器の出土地点分析によれば、城内でも政庁城の施釉陶器は北辺区画で出土した緑釉陰刻花文埴1点のみで、東方官衙南地区の施釉陶磁器の出土は圧倒的であるという。このため、胆沢城内では施釉陶磁器は政庁ではなく、東方官衙南地区を中心とした範囲で使用されたと考えられている（第1図、村田2017）。以下では、政庁南東に位置する東方官衙南地区の様相を中心に分析を行う。

(1) 出土数と出土状況

東方官衙南地区出土の施釉陶磁器数は、緑釉陶器343点、灰釉陶器192点、輸入陶磁器22点、計557点で（第1表）、緑釉陶器が62%を占める。輸入陶磁器は白磁と比較して青磁が多い。これに対し外郭南門地区の出土施釉陶器数は計50点で、灰釉陶器が32点（64%）を占める。

地区毎に出土量が異なる状況は、既に多賀城跡で指摘されており（高橋2020）、東方官衙南地区の様相は饗宴に関わる施設の存在が想定されている多賀城跡の正門・五万崎地区の様相に類似する。

また100㎡あたりの破片数は、外郭南門地区では

1点未満であるのに対し、南地区合計では15.07点と高い数値を示す。東方官衙南地区では、饗宴や祭祀に関わる施設の存在が想定され、施釉陶磁器の使用と廃棄が行われたと考えられる。

(2) 器種構成

緑釉陶器では埴・皿類が314点（92%）を占め、続いて香炉片12点（4%）の出土が目立つ（第2表）。灰釉陶器では埴・皿類が107点（56%）、次いで壺・瓶類が77点（40%）を占める。

(3) 産地と時期

産地分析の結果、緑釉陶器では猿投窯産が主体で、可能性があるものを含め231点（68%）を占める。続いて東海西部産が82点（24%）を占め、洛北産・洛西産各6点（2%）、畿内産14点（4%）、近江産2点、篠窯産1点、不明1点である。灰釉陶器では、東濃窯産117点（61%）、猿投窯産56点（29%）、尾北窯産18点（9%）と東濃窯産の出土が目立つ。

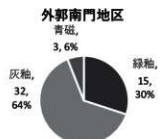
また出現時期をみると（第3表）、緑釉陶器ではA期29点、A-B期15点、B期56点、B-C期2点、C期2点、B期にA期の約2倍と最大数になるが、10世紀代のC期には激減する。灰釉陶器では、原始灰釉3点、A期41点、A-B期3点、B期56点、B-C期1点、原始灰釉の出土とA期の出土数の多さが緑釉陶器と比較し目立つものの、緑釉陶器と同様B期に出土数が最大となり、それ以降激減する。

産地の時期毎の様相をみると、緑釉陶器では全ての時期で猿投窯産が主体となる。しかし灰釉陶器は、原始灰釉・A期・A-B期には猿投窯産が主体を占めるが、A期では尾北窯産も猿投窯産の約半数出土、B期では猿投窯産が減少し東濃窯産が主体を占める状況となるなど、供給先に変化がみられる。

輸入陶磁器は、青磁は越州窯系、白磁は邢窯系製

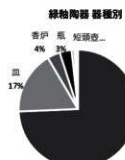


第1図 胆沢城跡施釉陶器分布図

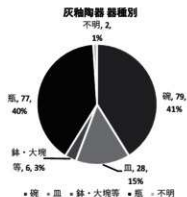


第1表 胆沢城跡施釉陶器出土数

碗	248
小碗	7
皿	58
耳皿	1
香炉蓋	8
香炉	4
瓶	8
水注	2
小瓶	1
短頸香	2
小短頸香	1
合子	1
鍬か鉄鉢	1
不明	1
計	343

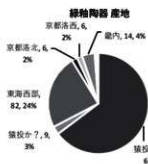


碗	78
小碗	1
皿	26
耳皿	2
鉢・鉢	3
大碗	3
瓶	45
長頸香	19
小瓶	4
平瓶	4
短頸香	2
手付瓶	2
有耳香	1
不明	2
計	192



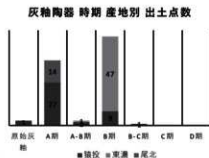
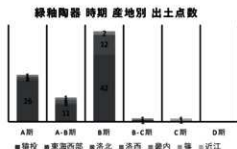
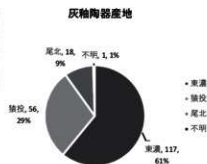
第2表 施釉陶器の器種別割合

猿投	222
猿投か?	9
東海西部	82
京都洛北	6
京都洛西	6
畿内	14
近江	2
薩	1
不明	1
小計	343



・猿投
・猿投か?
・東海西部
・京都洛北
・京都洛西
・畿内
・近江
・薩
・不明

東瀧	117
猿投	56
尾北	18
不明	1
小計	192



第3表 施釉陶器の産地・時期別割合

品であり、10世紀前半代には施釉陶磁器の出土数が激減する状況が反映されている。

2. 志波城跡・徳丹城跡

志波城跡では、政庁南方地区で灰釉陶器壺・蓋各1点、郭内北東部で灰釉陶器蓋1点、外郭北西部で緑釉陶器壺・壺が各1点出土している。官衙城からの出土は無い。

徳丹城跡では、外郭北門地区で灰釉陶器瓶1点、外郭南西地区で越州窯系青磁碗1点が出土している。いずれも外郭線上の区画溝であり、官衙城からの出土は無い。

3. 伯濟寺遺跡

胆沢城跡に隣接し、上級官人の居宅と付属工房と想定される遺跡である。遺構としては四面底付建物を含む掘立柱建物や竪穴建物、遺物としては文字関連遺物・瓦・石帯などが検出されている。

施釉陶磁器の内訳は、緑釉陶器93点、灰釉陶器102点で、輸入陶磁器は出土していない。工房を含む竪穴建物が分布する東地区で緑釉陶器81点(87%)、灰釉陶器77点(75%)と出土量の大部分を占め、大型掘立柱建物や付属建物が分布する西地区からの出土は少ない。

緑釉陶器の器種は、壺・皿類89点(96%)、大壺・瓶類・香炉各1点(各1%)である。産地・時期は、A期の洛北産13点、A-B期の猿投窯産8点、B期後半～C期初頭の猿投窯産68点(緑彩輪花壺・印刻花文壺・皿含む)、B期の東濃窯産3点、D期の近江産1点である。灰釉陶器の器種は、瓶類73点(71%)、壺・皿27点(26%)、蓋2点(2%)である。産地・時期は、A-B期の篠岡産2点、B期後半～C期初頭の猿投窯産97点・東濃窯産3点である。胆沢城跡よりB期後半～C期初頭の猿投窯産の比率が高い。なお、胆沢城跡では緑釉陶器と灰釉陶器の出土比率が異なり、使用方法の相違に伴う種類の選択性を示している可能性がある。

4. 岩手県域の様相(第2図、第4表)

出土遺跡は68遺跡(城柵3・寺院1・集落64)で、令制六郡内に位置する北上川中流域の平野部に集中

し、内陸北部では出土していない。種別毎の遺跡数は、緑釉陶器37、灰釉陶器46、輸入陶磁器7である。なお、沿岸部の4遺跡は報告7で記載する。

竪穴建物からの出土が73軒と最も多く、約半数が付属施設内や床面直上からの出土である。その他、土坑・掘立柱建物(柱穴)・井戸・溝・堀、旧河道や整地層からも出土している。用途が推定できる事例として、土器・陶磁器を一括廃棄した胆沢城跡SK3305、「万燈会」に使用したと考えられる黒書土器や灯明皿と共に二次被熱した緑釉陶器托が出土した奥州市中半入遺跡SD16等がある。

時期別の分布をみると、A・B期は胆沢城跡が流通・使用の中心であり、城柵及び胆沢城跡周辺に集中する。B期には分布域が拡大し、遺跡数及び出土点数が最も多くなる。しかし、C期には胆沢城跡が中心的役割を果たさなくなり、遺跡数は減少し、胆沢城跡でも出土量が激減する。D期には奥州市以南にのみ分布するようになる。なお、平泉町瀬原Ⅱ遺跡SI08のように遺構内から出土した施釉陶磁器と相伴土器の年代観や自然科学分析等の年代測定結果に時間差があるものがある。

器種はどの種別も壺・皿類が主体であるが、C期以降は灰釉陶器をはじめ瓶類が多くなる。緑釉陶器はB期に手付瓶・唾壺・托・香炉等の器種が増え、壺・皿類でも陰刻花文や緑彩を施した製品も出土している。灰釉陶器は、短頸壺・小瓶・耳皿等が確認されている。輸入陶磁器は胆沢城跡出土の青磁蓋以外は壺・皿類である。産地は、緑釉陶器が猿投窯・東海西部(東濃・篠岡)・京都(栗北・洛西)・篠窯・近江、灰釉陶器が猿投窯・東濃窯・尾北窯である。京都産の緑釉陶器はいずれもA・B期で、胆沢城跡とその周辺に集中する。

城柵や沿岸部の遺跡も含めた主な遺跡内出土遺物の相伴関係は、文字関連(墨書・刻書土器、硯)44遺跡(以下「遺跡」省略)、農工具40、金属生産関連(鉄滓・羽口・埴壇)32、武器27、土鍾19、土製紡錘車11、瓦9、石帯6、製塩土器4等である。金属生産関連と鉄製品は、灰釉陶器出土遺跡での共

伴率が緑釉陶器・輸入陶磁器よりも高い。また、律令系遺物(瓦・石帯)との共伴率が高いほか、土製紡錘車や土錘、製塩土器といった生産・生業関連遺物の共伴率が高い点も注目される。

参考文献

伊藤博幸ほか1984「肥前県東部官衙南地区出土の施軸陶器」

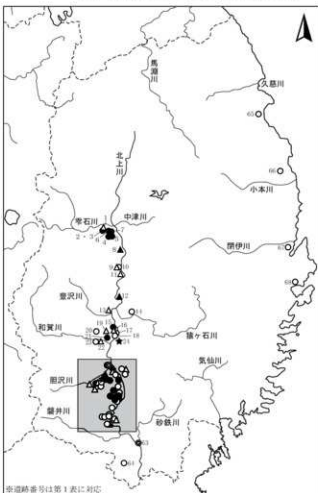
『考古学雑誌』第70巻第1号

高橋 透 2020「多賀城施釉陶磁器」『宮城県多賀城跡調査研究所
資料V』

村田 淳 2016「東北地方北部の施釉陶磁器」『第II分科会

北東北9・10世紀社会の変動 研究報告資料集

日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会



第2圖 岩手県施釉陶磁器出土遺跡分布図

村田 淳 2017「東北地方北部出土の麻軸陶磁器—城柵遺跡に

おける性格の検討」『記要』第36号

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

[illegible]

※2: D類のうち、前半は10世紀後半、後半は11世紀代

第4表 岩手県施釉陶磁器出土遺跡一覧

陸奥国南部の様相

須賀川市文化振興課 菅野 和博

はじめに

陸奥国南部（現在の福島県域）における古代施釉陶磁器の出土遺跡は65遺跡、470点（灰釉359点、緑釉97点、二彩・三彩10、輸入陶磁器4）となる。柳沢和明が1994年に陸奥国の集成のうち陸奥国南部は15遺跡、270点（灰釉197点、緑釉70点、奈良二彩・三彩2、輸入陶磁器1点）であり（柳沢1994）、資料数が大幅に増加した。

ここでは、陸奥国南部の施釉陶磁器の分布と出土遺跡の特徴などについてまとめる。なお、施釉陶磁器の産地分類・編年は『多賀城施釉陶器』に準拠した（宮城県多賀城研2020）。

1. 施釉陶磁器の分布

施釉陶磁器の分布は中通り地方で25遺跡（26地点）、浜通り地方で18遺跡（20地点）、会津地方で17遺跡（18地点）となる。会津・浜通り地方では灰釉陶器が出土する遺跡の半数近くが緑釉陶器も保有するのに対し、中通りは灰釉陶器のみの出土が大半である。

①灰釉陶器

小茶円遺跡（いわき市）、三城湯家北遺跡（猪苗代町）に集中し、他の遺跡は個体数で10個体未満である。産地は尾張産（猿投・尾北窯）が多く、東海西部（東濃窯）が続く。東海東部産（二川窯）は白河関跡（白河市）で出土している。器種は、碗皿類が多く、瓶類が続く。碗皿類は段皿や輪花は少ない。瓶類は長頸瓶（または広口瓶）が多く、無台の小瓶は白河郡家の関和久上町遺跡（泉崎村）や小茶円遺跡、三城湯家北遺跡などで出土している。このほか、三城湯家北遺跡では耳皿、福島市勝口前畑遺跡では平瓶がある。

時期は尾野編年Ⅴ期新段階（9世紀初頭）からⅧ期古段階（11世紀前半）まで確認できたが、主体はⅥ期（9世紀前半～10世紀前半）が大半を占める。Ⅶ期以降の主な資料は大江古屋敷遺跡（会津坂下町）、慧日寺跡（磐梯町）、栄町遺跡（須賀川市）、馬場小路遺跡（郡

山市）、番匠地遺跡（いわき市）などで出土している。

②緑釉陶器

出土遺跡は28遺跡（地点）を数え、灰釉陶器出土遺跡数の約半分となる。大半は1点のみの出土で、複数個体出土する遺跡は磐城・会津郡家周辺、耶麻郡南部・会津郡北部、信夫郡南部（勝口前畑遺跡）などに限定される。

産地は灰釉陶器同様、尾張産や東海西部が多い。山城産（洛北・洛西窯）は小茶円遺跡や鏡ノ町遺跡A・Bなどで、近江産は関和久遺跡（白河郡家）や三本木遺跡（会津坂下町）などで認められる。

器種は碗皿類が圧倒的であるが、鏡ノ町遺跡Bで陰刻花文のある段皿、小茶円遺跡の椀碗（ともに尾張：尾野Ⅵ中段階）がある。手付瓶は東原A遺跡（双葉町）、関畑遺跡（本宮市）、鏡ノ町遺跡Aと中谷地遺跡（喜多方市）、蓋が鏡ノ町遺跡Bと小茶円遺跡で出土している。時期は尾張・東濃窯の尾野編年Ⅴ新段階（9世紀前半）の東高久遺跡（会津若松市）出土碗などが最も古く、山城・篠窯産の高橋編年Ⅱ～Ⅲ期（9世紀中～末）、近江産の高橋編年Ⅱ古期（10世紀後半）まで認められる。

③その他

多彩陶器（奈良三彩・二彩）は7遺跡で出土している。小壺ないし壺が岩崎町遺跡（福島市）、大久保F遺跡・大猿田遺跡（いわき市）、鏡ノ町遺跡A（喜多方市）で、浄瓶が七ツ池遺跡（郡山市）、火舎が慧日寺跡（磐梯町）、托が小浜代遺跡（富岡町）で出土している。

貿易陶磁器は4個体出土している。大江古屋敷遺跡と大毛内B遺跡（相馬市）で越州窯系青磁碗、吉原遺跡（会津坂下町）では邢州窯系壺、長沙窯系緑釉壺がそれぞれ出土している。時期は吉原遺跡が9世紀後半、大江古屋敷遺跡と大毛内B遺跡は10世紀である。

2. 遺跡の性格と施釉陶磁器の組成・時期

①郡家と郡家周辺

白河郡家の関和久・関和久上町で灰釉陶器7個体と

緑釉1個体の合計8個体、石背郡家の栄町遺跡で灰釉陶器3個体の報告がある。両遺跡とも郡庁・正倉での出土が少なく、館院と考えられるブロック（関和久遺跡の中宿・古寺地区、栄町遺跡の1～3次調査区）での出土が多い。器種は碗が多いが、関和久上町遺跡の区画溝からは灰釉陶器小瓶が出土している。時期は尾野編年V期古段階からVI期（9世紀代）を中心とする。

また、両遺跡とも灰釉陶器を用いた転用硯が確認されている。灰釉陶器を用いた転用硯は磐城郡の生産工房である大猿田遺跡でも認められ、官衛的傾向が強い。

一方、磐城郡家の北西部に位置する小茶円遺跡は灰釉陶器90個体、緑釉陶器38個体が報告され、陸奥国南部で最大の出土量となる。灰釉陶器は尾張・東海西部（東濃）が主で、緑釉陶器は尾張・東海西部（東濃）に加え、山城・篠室も一定量含まれるのが特徴で、時期は尾野VI期を主体とする。遺構は竪穴建物跡と小規模な掘立柱建物からなる遺跡で、大同元（806）年銘の木簡などが出土している。河川近くの立地などから、荒田目条里・砂畑遺跡などとあわせて、津の可能性が高いと考えている。

このほか、行方郡家周辺の広畑遺跡、標葉郡家周辺の東原A遺跡、会津郡衙周辺の遺跡群（西木流C・D、鶴沼B遺跡など）、信夫郡家推定地周辺の五十辺遺跡でも2個体以上の施釉陶器（灰釉陶器と緑釉陶器）が出土している。時期は9世紀代を中心とし、多くは円面硯などの陶硯を出土する。

②寺院

石背郡家付属寺院の上人壇壝寺跡では、灰釉陶器11点、緑釉陶器1点が出土している。灰釉は碗皿類と瓶類で輪花碗を含む。また、金付着の緑釉陶器は紺紙の莊厳経などに用いられた可能性が高く、撥形の経軸端も出土している。金付着の灰釉陶器は多賀城跡・山王遺跡・後田遺跡などで出土しているが、緑釉陶器の使用例としては唯一となろう（埼玉県埋文1997）。

慧日寺跡では、尾野VI期までの灰釉陶器のほか、二彩火舎なども含まれる。小浜代遺跡でも二彩の托が出土している。

③豪族居宅・生産遺跡

郡家から距離があり、かつ小規模で計画的な掘立柱

建物を配置、圍繞の区画溝・塀を有するものなどを豪族居宅としたほか、掘立柱建物跡などを主とする遺跡や生産遺跡（鍛冶・製鉄・土器）もここに含めた。

豪族居宅は耶麻郡の鏡ノ町遺跡A・B、会津郡の大江山古屋敷遺跡、信夫郡の勝口前畑遺跡や岩崎町遺跡、安積郡の正直C遺跡、石背郡の矢ノ目A遺跡などで認められる。組成は、灰釉陶器を主とするが、緑釉陶器もしくは多彩陶器・貿易陶磁器が出土する例が多い。灰釉陶器も勝口前畑遺跡では平瓶が出土するなど、ほかでは出土しない器種も認められる。

生産遺跡の代表は、磐城郡の久保F遺跡（土器生産）や大猿田遺跡（木製品）が挙げられる。双方とも二彩陶器を保有するのが特徴である。

④交通関連遺跡

東山道などの駅路、郡家間の伝路などに立地する駅家や関連する集落、河川近くの津が想定される例をここに含めた。

前者は、白河関跡（白河市）や松並平遺跡（棚倉町）などがある。松並平遺跡は弘仁2（811）年のいわゆる海道十駅廃止後、新たに設置された長有駅周辺に立地する駅子集落で、東濃製の灰釉陶器が出土する。

山間地の道路沿いに立地する例は荻平遺跡（相馬市）や岩ヶ作遺跡（郡山市）などがある。荻平遺跡は宇多郡と信夫郡を結ぶ山間地で、灰釉陶器のほか鈎帯が出土している。

津などの性格を考えられるのは、磐城郡家周辺の小茶円遺跡などや耶麻郡東部の三城湯家北遺跡、会津郡北部の遺跡群（高畑遺跡・吉原遺跡）などが挙げられる。三城湯家北遺跡は猪苗代湖北岸に位置し、運河状の大溝を中心に灰釉陶器が68個体出土している。個体数は小茶円遺跡に次ぐ量で、緑釉陶器はない。器種は碗皿を中心とし、輪花を含む。また、耳皿や小瓶も含まれる。産地はすべて東海西部（東濃製）で、実見したところ尾野編年VI期中段階から新段階にほぼ集中する。このほか、二間四方の倉など小規模な総柱建物を有する会津郡北部・耶麻郡南部の阿賀川沿いの遺跡群でも緑釉陶器や貿易陶磁器が出土する。

3. まとめ

陸奥国南部における施釉陶器の分布は、地域ごとで

は大きな傾向が認められない。特に灰釉陶器は9世紀後半以降、山間地の小規模な集落からも出土し、市や都鄙間の往来に伴って入手したことが想定される。

遺跡の性格では、郡家(郡庁院・正倉院)では少なく、郡家の館院や郡家周辺の関連遺跡、豪族居宅・出先機関と考えられる遺跡の出土量が多い。しかし、国府との隔たりは大きい。

一方で、出土量が卓越するのは、湖や河川近くに立地する交通の要所で、集積地・集散地の可能性が高い三城河家北遺跡や小茶円遺跡などの例である。船などの水運を利用し、荷揚げを行ったのちに陸路で流通していたことが想定されよう。

時期は灰釉陶器・緑釉陶器では9世紀中葉以降(尾野VI期中段階)の出土が多く、10世紀前半までは継続するが、10世紀中葉以降は減少、11世紀にはほぼ出土しない。

田中広明氏は関東地方の施釉陶器、特に灰釉陶器の流通について、9世紀後半以降に国府の「市」が最大の消費地として成長するとともに、大規模な開発を担う遺跡や富裕層が各地での拠点的な消費地となる点や、流通は国郡や都鄙間交通を基本としながらも、坂東に設置した勅使田や王臣家荘園の経営にかかわった富豪浪人や「敵馬の党」に代表される輸送請負集団が流通の原動力となった点を指摘する(田中2003)。このほか、国府に出土が偏る事実は国司の出自による可能性も指摘されている(平尾・尾野2009)。

これら先行研究にある坂東諸国での状況が陸奥・出羽にも該当するのかが今回問題提起することとどめ、今後の課題としたい。

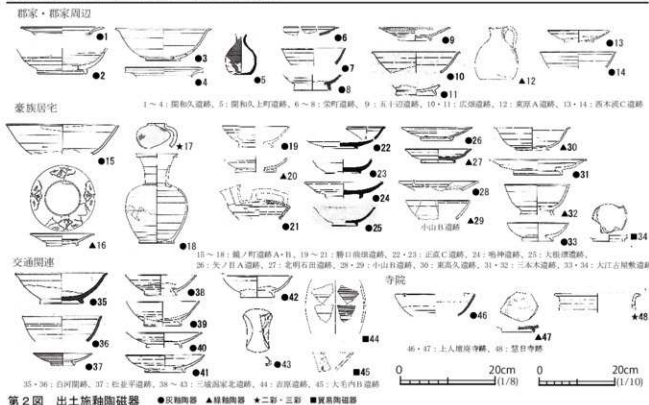
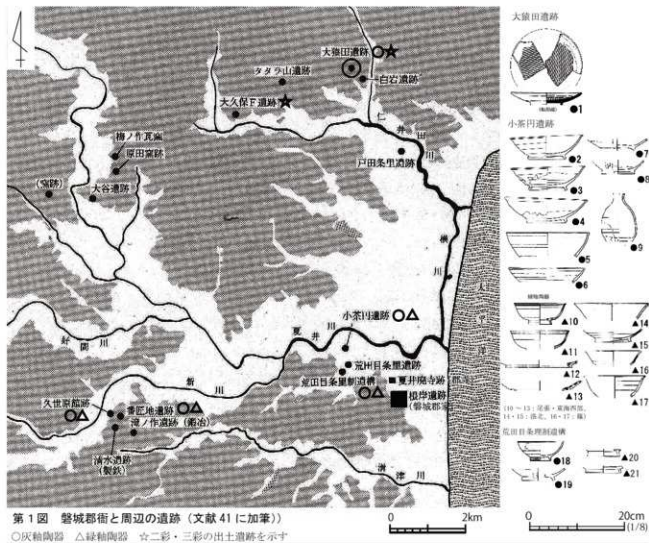
引用・参考文献

- 柳沢和明 1994 「東北の施釉陶器―陸奥を中心に―」『古代の土器研究―一律的土器様式の西・東3 施釉陶器』、古代の土器研究会
- 埼玉県埋蔵文化財センター 1997 『中根遺跡』第190集
- 田中広明 2003 『古代の家族と古代の官人』柏書房
- 平尾政幸・尾野善裕 2009 『湘南新道間遺跡出土施釉陶器の様相と相模国府』『湘南新道間遺跡Ⅱ』かねがわ考古学財団
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2020 『多賀城跡施釉陶器』研究所資料V

第1表 施釉陶磁器出土一覧(灰釉陶器3個体、緑釉陶器・多彩陶器・輸入陶磁器は1個体以上の出土例)

郡	遺跡名	所在地	灰釉		緑釉		多彩	輸入	文庫
			数量	品数	数量	品数			
都賀郡	古馬遺跡	多摩市			2			1	
	堀ノ町遺跡A	多摩市	1		2	1	1	2	
	堀ノ町遺跡B	多摩市	2	1	1	1		2	
	堀ノ内遺跡	多摩市			11			4	
	小茶円遺跡	多摩市	1		4	1		5	
市川市	笠立寺跡	稲村町	10	○	○		2	6	
	二城河家北遺跡	稲村町	64	4				7	
市川郡	葛村遺跡	市川市	3					8	
	西木田(上・西園寺)	市川市			1			9	
	東高久遺跡	市川市	1		1			10	
	西木田(下・藤田)	市川市			2			11	
	高橋遺跡	市川市下町						11	
	永木遺跡	市川市下町	1					12	
	人江古史家遺跡	市川市下町	2					13	
	古原遺跡	市川市下町					2	14	
	川原出遺跡	稲村町	1		1			15	
	堀ノ内遺跡	稲村町	15					16	
信太郡	五斗遺跡	稲村町	17	3				17	
	堀ノ内遺跡	稲村町	1				2	18	
	藤川前遺跡(4)	稲村町			2	4		19	
	藤川前遺跡(2)	稲村町	1		1			20	
	中台遺跡	本宮市			1			21	
安房郡	関津遺跡	本宮市						22	
	正直遺跡(文庫)	郡山市	4					23	
	堀ノ内遺跡(2表)	郡山市	4		1			24	
	七ツ池遺跡	郡山市					1	24	
石巻郡	東野遺跡	東野町	20	3	4			25	
	土人権遺跡	東野町	16	3	1			26	
	北野石田遺跡	東野町			2			27	
	久ノ目遺跡	東野町	6					28	
白河郡	鶴岡(中層・古平地区)	白河市	3		1			29	
	白河国府	白河市	9					30	
	松葉平遺跡	東吾町	3	2				31	
平太郡	大内内遺跡	佐田町						32	
	長手遺跡(2表)	佐田町	2	1				33	
	別所遺跡	別所町			1			34	
伊予郡	松原遺跡	伊予市	4					35	
	小丘代遺跡	高野町					2	36	
	東郷大遺跡	反原町						37	
	堀松遺跡	伊予市						38	
	小山田遺跡	伊予市	2	3				39	
磐城郡	大久保子遺跡(2表)	小千守市			1		1	40	
	久保子遺跡(2表)	小千守市			1			41	
	久保子遺跡	小千守市	4					42	
	大内内遺跡・東野遺跡	小千守市				1		43	
	小丘内遺跡	小千守市	87	3	27	1		44	
	東野遺跡・東野遺跡	小千守市	17	4				45	
磐前郡	神子前遺跡	小千守市	6	1	4			46	

- 1: 堀ノ内遺跡 1960 『古馬遺跡』、p.96、図2; 堀ノ内遺跡 1967 『古馬遺跡』、p.93、図3; 2: 堀ノ内遺跡 2004 『堀ノ内遺跡』、p.9、図4; 3: 堀ノ内遺跡 1998 『堀ノ内遺跡』、p.4、図5; 4: 堀ノ内遺跡 2010 『古馬遺跡』、p.9、図6; 5: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図7; 6: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図8; 7: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図9; 8: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図10; 9: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図11; 10: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図12; 11: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図13; 12: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図14; 13: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図15; 14: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図16; 15: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図17; 16: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図18; 17: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図19; 18: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図20; 19: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図21; 20: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図22; 21: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図23; 22: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図24; 23: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図25; 24: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図26; 25: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図27; 26: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図28; 27: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図29; 28: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図30; 29: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図31; 30: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図32; 31: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図33; 32: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図34; 33: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図35; 34: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図36; 35: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図37; 36: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図38; 37: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図39; 38: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図40; 39: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図41; 40: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図42; 41: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図43; 42: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図44; 43: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図45; 44: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図46; 45: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図47; 46: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図48; 47: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図49; 48: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図50; 49: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図51; 50: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図52; 51: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図53; 52: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図54; 53: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図55; 54: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図56; 55: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図57; 56: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図58; 57: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図59; 58: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図60; 59: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図61; 60: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図62; 61: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図63; 62: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図64; 63: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図65; 64: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図66; 65: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図67; 66: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図68; 67: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図69; 68: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図70; 69: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図71; 70: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図72; 71: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図73; 72: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図74; 73: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図75; 74: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図76; 75: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図77; 76: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図78; 77: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図79; 78: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図80; 79: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図81; 80: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図82; 81: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図83; 82: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図84; 83: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図85; 84: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図86; 85: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図87; 86: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図88; 87: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図89; 88: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図90; 89: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図91; 90: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図92; 91: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図93; 92: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図94; 93: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図95; 94: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図96; 95: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図97; 96: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図98; 97: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図99; 98: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図100; 99: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図101; 100: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図102; 101: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図103; 102: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図104; 103: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図105; 104: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図106; 105: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図107; 106: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図108; 107: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図109; 108: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図110; 109: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図111; 110: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図112; 111: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図113; 112: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図114; 113: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図115; 114: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図116; 115: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図117; 116: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図118; 117: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図119; 118: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図120; 119: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図121; 120: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図122; 121: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図123; 122: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図124; 123: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図125; 124: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図126; 125: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図127; 126: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図128; 127: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図129; 128: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図130; 129: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図131; 130: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図132; 131: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図133; 132: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図134; 133: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図135; 134: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図136; 135: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図137; 136: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図138; 137: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図139; 138: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図140; 139: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図141; 140: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図142; 141: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図143; 142: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図144; 143: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図145; 144: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図146; 145: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図147; 146: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図148; 147: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図149; 148: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図150; 149: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図151; 150: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図152; 151: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図153; 152: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図154; 153: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図155; 154: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図156; 155: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図157; 156: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図158; 157: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図159; 158: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図160; 159: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図161; 160: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図162; 161: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図163; 162: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図164; 163: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図165; 164: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図166; 165: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図167; 166: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図168; 167: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図169; 168: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図170; 169: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図171; 170: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図172; 171: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図173; 172: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図174; 173: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図175; 174: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図176; 175: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図177; 176: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図178; 177: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図179; 178: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図180; 179: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図181; 180: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図182; 181: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図183; 182: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図184; 183: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図185; 184: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図186; 185: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図187; 186: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図188; 187: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図189; 188: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図190; 189: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図191; 190: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図192; 191: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図193; 192: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図194; 193: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図195; 194: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図196; 195: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図197; 196: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図198; 197: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図199; 198: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図200; 199: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図201; 200: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図202; 201: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図203; 202: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図204; 203: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図205; 204: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図206; 205: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図207; 206: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図208; 207: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図209; 208: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図210; 209: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図211; 210: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図212; 211: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図213; 212: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図214; 213: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図215; 214: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図216; 215: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図217; 216: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図218; 217: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図219; 218: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図220; 219: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図221; 220: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図222; 221: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図223; 222: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図224; 223: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図225; 224: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図226; 225: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図227; 226: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図228; 227: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図229; 228: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図230; 229: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図231; 230: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図232; 231: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図233; 232: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図234; 233: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図235; 234: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図236; 235: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図237; 236: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図238; 237: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図239; 238: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図240; 239: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図241; 240: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図242; 241: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図243; 242: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図244; 243: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図245; 244: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図246; 245: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図247; 246: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図248; 247: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図249; 248: 堀ノ内遺跡 1998 『古馬遺跡』、p.9、図250; 249: 堀ノ



はじめに

出羽国の南部(山形県)は、周囲を日本海と山脈に囲まれており、盆地が並ぶ内陸部と平野が広がる日本海側(庄内)に大別される。日本海側と内陸部という2地域を結ぶように貫流しているのが最上川であり、鉄道が敷設される近代以前まではその支流河川も含め、重要な交通路として利用されてきた。

和銅5年(712)の出羽建国当初は、内陸部の置賜郡・最上郡は陸奥国に属し、その後出羽国に分置されている。なお、最上郡は仁和2年(886)に分郡し北が村山郡・南が最上郡となっている。

内陸部の置賜盆地・山形盆地は、古墳時代に古墳や集落が多く造られた地域である。7世紀前半～中頃は集落遺跡数が激減し、域内の様相が不明瞭となるが、7世紀後半以降になると、集落の再出現や窯業生産が始まる。両地域ともに7世紀後半以降の遺跡においては、竪穴建物のカマド形態や関東系土師器が出土する状況などから、陸奥国の影響とさらには関東からの移民の存在も想起させる。

日本海側(庄内)は、7世紀～8世紀前半までの遺跡は発見されておらず、遺構・遺物が確認できるのは、8世紀中頃以降である。北陸の土器生産の影響を強く受けており、北陸の支配者層及び須恵器工人が庄内へ進出し、地域開発・経営を担っていたことが想定される。

1. 出羽国南部における出土状況

出羽国南部における出土遺跡分布には、地域的な偏りがみられる(第1図・第2表)。庄内は最上川を境として南北に分けられるが、両者では施釉陶磁器の出土状況が大きく異なる。庄内北部は、出羽国南部で最も多く出土しており、さらに碗皿類や壺瓶類以外にも香炉や陶枕といった器種がある。一方、庄内南部の鶴岡市域では、庄内北部とは異なり、出土数が非常に少ない状況である。

内陸部では、貿易陶磁器や香炉等の出土が確認されておらず、碗皿類と壺瓶類が出土している。また北に

位置する新庄盆地では、古代の遺跡自体が非常に少なく、施釉陶磁器が出土している遺跡も確認されていない。

次に施釉陶磁器出土遺跡の分布状況から特に注目される遺跡をとりあげる。

(1) 内陸(村山郡・最上郡・置賜郡)

・成沢西遺跡

成沢西遺跡は、古代最上郡域の須川沿いにあり、最上郡内では唯一緑釉陶器が出土している。この遺跡の北西部には、吉原遺跡群があり、多くの掘立建物跡や区画する溝跡が発見されている。成沢西遺跡と吉原遺跡群は、置賜盆地や仙台平野など周辺地域との交通上の要衝とみなされている。

・太夫小屋1遺跡

米沢盆地(置賜郡)に所在する川西町の太夫小屋1遺跡は、大型の建物跡や区画溝、円面硯や多くの墨書土器が発見されたことから、置賜郡における重要な官衙遺跡もしくは寺院跡と考えられている。内陸部の遺跡では最も出土点数が多い。また、碗皿類よりも、瓶類が多く出土している。

(2) 庄内北部

・下長橋遺跡と周辺遺跡(日光川・荒瀬川右岸)

遊佐町南部の下長橋遺跡は越州窯系青磁碗や東濃窯産灰釉陶器などが出土している。東田遺跡では、緑釉陶器香炉が出土している。下長橋遺跡と隣接しており、一体の遺跡として捉えられる。そしてこの2遺跡の東側には、中世における北限の荘園とされる遊佐荘の中心地大掘遺跡があり、庄内北部においては、古代から中世への転換期における重要な場所といえるだろう。

・城輪跡周辺(日光川・荒瀬川左岸～最上川右岸)

酒田市域に含まれる日光川・荒瀬川左岸の平野部では、城輪跡や国府に関係する寺院跡と考えられている堂の前遺跡をはじめ、沼田遺跡や熊野田遺跡など官衙関連遺跡が多く調査されている。さらに東部丘陵上

第1表

政庁北方地域 調査面積 17,674 m²

種別	出土点数	比率 (%)	100 m ² あたりの破片数
貿易陶磁器	27	4.1%	0.15
緑釉陶器	172	26.2%	0.97
灰釉陶器	457	69.7%	2.59
合計	656	100%	3.68

には須恵器窯などの生産遺跡が多く所在する。この地域の特徴としては、出羽国南部の他地域に比べて貿易陶磁器や緑釉陶器の特殊品が多く出土している点が挙げられる。後田遺跡の青磁香炉など城輪柵跡以外でも特殊品（高級品か）が出土している。最も多く出土している城輪柵跡が単独で存在していたのではなく、周辺に分布する遺跡との強い関連性がうかがえる。

2. 城輪柵跡の出土状況

酒田市に所在する城輪柵跡は、昭和6年の文部省による調査結果により、翌7年国史跡に指定された遺跡である。城輪柵跡の年代は、政庁建物の変遷と相伴する遺物から、9世紀前半～11世紀前半をⅠ期からⅣ期に区分し、さらにⅡ期、Ⅲ期についてはそれぞれ2段階に分けている。

政庁北方地域の調査は、酒田市が公有地化した政庁北側 17,674 m²の範囲を対象とし、東側から1～8区に調査区を分けている。

・城輪柵跡の施釉陶磁器出土状況

城輪柵跡で出土した施釉陶磁器は、総数 751 点である。城輪柵跡全体での出土量に占める政庁北方地域の出土割合は、総数の約 87%を占め、突出した出土量である。なお、政庁北方地域以外の地点での出土点数は、貿易陶磁器 3 点、緑釉陶器 47 点、灰釉陶器 37 点で合計は 87 点となる。政庁北方地域以外では、政庁南門外南東地区で、比較的まとまって出土しており、この中には、顕著に使用された痕跡を持つ製品（稜皿）もある。政庁中心にある正殿や脇殿など、主要建物付近でも出土していない。なお、灰釉陶器については、9世紀中頃～10世紀代まで、比較的長期間使用されていたと考えられる。

・政庁北方地域の施釉陶磁器出土状況

1) 出土破片数と分布

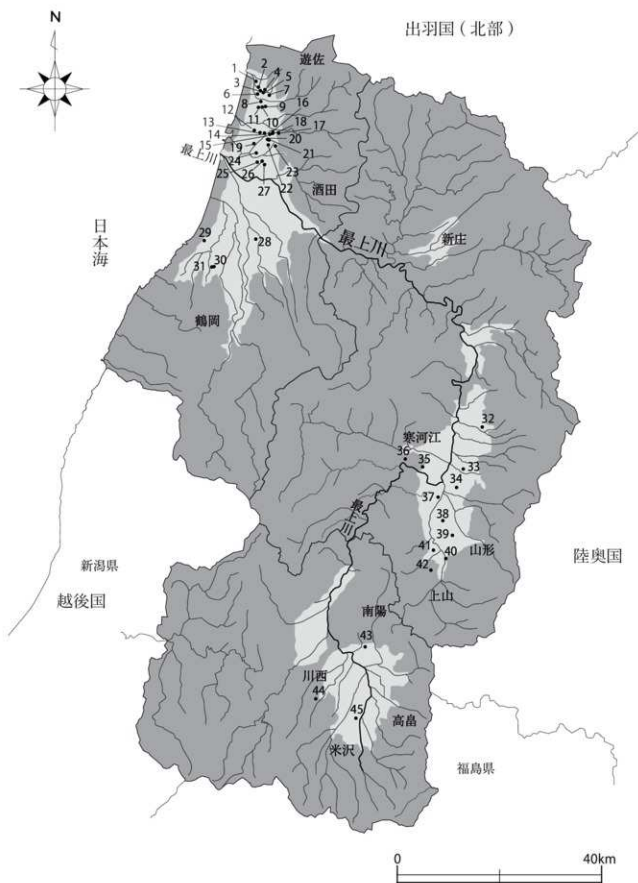
特徴としては、貿易陶磁器が 20 点以上出土していることと緑釉陶器出土数が 100 m²あたり 0.97 個、比率 26.4%という点が挙げられる（第1表）。貿易陶磁器は数量的にも少なく、分布のまとまりはみられないが、緑釉・灰釉陶器は3区と4区に集中する地点がある。

2) 貿易陶磁器について

政庁北方地域で出土した貿易陶磁器には唐三彩陶枕、白磁、長沙窯産碗、越州窯系青磁がある。唐三彩以外の器種はすべて碗皿と考えられる。白磁は、玉壁高台の碗と碗体部片の2点あるが、玉縁口縁の破片は出土していない。越州窯系青磁の中には、Ⅰ期の蛇の目高台碗や削出高台で底部外面に目跡が複数個残るもの、輪花碗がある。

おわりに

出羽国南部の中では、日本海側の庄内北部が最も多く施釉陶磁器が出土しており、その中でも城輪柵跡の出土量は突出している。出羽国南部で出土している約 950 点のうち、庄内北部の遺跡から 90%以上出土しており、さらにその中でも城輪柵跡は全体の8割近くを占めている。城輪柵跡は、従前、外郭施設や政庁建物等からその性格論が論じられ、平安期の出羽国府として認識されている。施釉陶磁器の出土状況からも、出羽国府に相応しい遺跡であるといえるだろう。さらに内陸の遺跡と城輪柵跡を中心とする庄内北部は、施釉陶磁器という、出羽国以外の遠隔地で生産され搬入された共通の製品が出土していることから、最上川とその支流という交通ルートによって結びついていたことが想定される。



第1図 出羽国南部における施釉陶磁器出土遺跡

第2表 出羽国南部における施釉陶磁器出土数一覧

No	遺跡名	貿易陶磁器	緑釉陶器	灰釉陶器	備考	市町村
1	筋田遺跡	-	1	1		遊佐町
2	北目長田遺跡	-	3	3		遊佐町
3	木戸下遺跡	-	2	-		遊佐町
4	宮ノ下遺跡	-	1	1		遊佐町
5	上高田遺跡	-	3	2		遊佐町
6	木原遺跡	-	2	-		遊佐町
7	大坪遺跡	-	-	18		遊佐町
8	小深田遺跡	-	-	1		遊佐町
9	浮橋遺跡	-	2	1		遊佐町
10	下長橋遺跡	4	37	16	越州窯系青磁	遊佐町
11	東田遺跡	-	4	2	緑釉香炉	遊佐町
12	新田目城	-	-	1		酒田市
13	豊原遺跡	-	-	1		酒田市
14	城輪柵跡	33	217	498		酒田市
15	後田遺跡	8	5	3		酒田市
16	茅針谷地遺跡	-	2	1		酒田市
17	八森遺跡	-	1	-		酒田市
18	堂ノ前遺跡	3	-	-		酒田市
19	上曾根遺跡	-	2	-		酒田市
20	沼田遺跡	-	4	2		酒田市
21	俵田遺跡	-	1	1		酒田市
22	境興野遺跡	-	-	1	灰釉手付き瓶	酒田市
23	北境遺跡	-	-	1		酒田市
24	新青渡遺跡	-	-	1		酒田市
25	熊野田遺跡	-	3	1		酒田市
26	手蔵田2遺跡	-	-	1		酒田市
27	手蔵田6・7遺跡	-	2	1		酒田市
28	平形遺跡	-	1	1		鶴岡市
29	西谷地遺跡	-	-	3		鶴岡市
30	月記遺跡	-	-	-	奈良三彩1点	鶴岡市
31	後田遺跡	-	-	1		鶴岡市
32	小田島城跡	-	-	2		東根市
33	的場遺跡	-	-	1		天童市
34	中袋遺跡	-	-	5		天童市
35	三条遺跡	-	-	1	本文記載のみ	寒河江市
36	富山2遺跡	-	-	1	原始灰釉陶器	寒河江市
37	達磨寺遺跡	-	-	1		中山町
38	梅野木前1遺跡	-	-	1		山形市
39	双葉町遺跡	-	1	2		山形市
40	成沢西遺跡	-	2	-		山形市
41	樋渡遺跡	-	1	-		山形市
42	萩原遺跡	-	-	1		山形市
43	庚壇遺跡	-	-	1		南陽市
44	太夫小屋1遺跡	-	2	30		川西町
45	大浦B遺跡	-	-	1		米沢市
合計		48	299	610		

出羽国北部の様相

秋田市観光文化スポーツ部文化振興課 佐藤桃子

秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所 小山美紀

はじめに

秋田城跡と弘田柵跡で出土した施釉陶磁器は、各報告書にて詳細が報告され考察が重ねられてきた。秋田県全体の様相については村田淳の論考がある。村田は秋田城跡と弘田柵跡では施釉陶磁器は鍛冶・漆関連工房から出土しており、意図的な埋納ではなく生産開始または終了時の儀礼に用いられたと推測し、城柵以外の遺跡については県北部と県央・県南部では様相が違うことを指摘している(村田 2012・2013・2016・2017)。

1. 秋田城跡

史跡秋田城跡は、秋田市西部、寺内地区を中心とする標高 40～50m の通称高清水丘陵上に位置した古代城柵である。古代出羽国北部の行政・軍事・文化の中心地としての性格を持ち、津軽(青森)や渡嶋(北海道)などの北方の蝦夷との交易と交流の拠点として、さらには大陸の渤海国との外交拠点としても重要な役割を果たしたと考えられる。外郭と政庁からなる二重の基本構造と城内外施設が把握されており、城内には中心施設の政庁のほか、実務官衙建物群や居住城、鍛冶等の生産施設、倉庫群などが確認されている。

秋田城全体での施釉陶磁器出土状況は灰釉陶器が 61 点、緑釉陶器が 29 点、輸入陶磁器 4 点(白磁 2 点、青磁 2 点)となっている(第 1 表)。

出土地点には偏りがあり、主に外郭東門から政庁に居た間の地区である大畑地区、外郭南東外の秋田城内より一段低い場所にある鶴ノ木地区、外郭南辺付近から場外南側の一帯である大小路地区となっており、その他少数点他の地区で確認されている(第 1 図)。

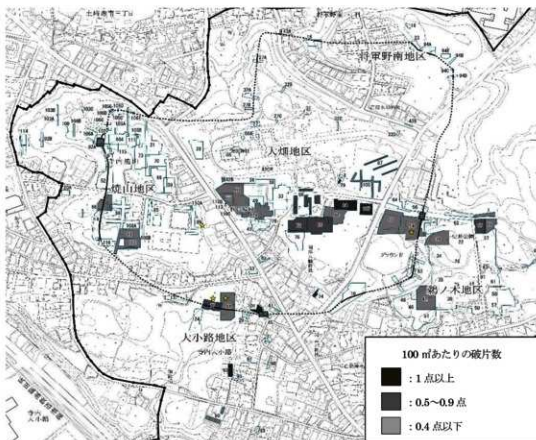
国産施釉陶器についての年代観は、9 世紀中頃から後半にかけて(黒埴 90 窯式)が一番多く確認されており、次いで 9 世紀前半から中頃にかけて(黒埴 14 窯式)が多くなっている。その他、10 世紀のものが少数確認

されている(第 2 表)。また、施釉陶器が出土した遺構の年代や包含層の堆積時期についても、年代が把握されるのは 9 世紀中頃から後半が主体を占めている。器種構成については、灰釉陶器は埴、皿、瓶、壺、三足盤、特殊器形壺がある。緑釉陶器は埴、皿となっている。貿易陶磁については、白磁は托、碗となっており、青磁は碗と壺となっている。

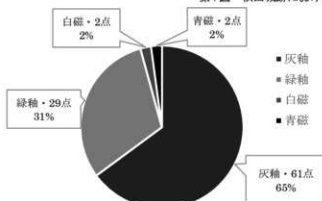
産地については、灰釉陶器は大半が鍛冶のものであり、東濃が数点確認されている。緑釉陶器は過半数が鍛冶であり、他に洛北、洛西、東濃、近江、山城のものが数点ずつ確認されている。

先述のとおり出土地点については偏りがあり、特に大畑地区に集中している。規則的配置に基づく掘立柱建物群や居住城、鍛冶工房群等が検出されており、9 世紀前半から中頃にかけて継続的に生産施設が操業していた地区であり、大畑地区で確認されている施設が活発に機能していた年代観と、施釉陶器の年代観が合致することから、施釉陶磁器は主に大畑地区を中心に使用されていたと考えられる。また前述のものより年代観が新しい施釉陶器が少数ながら確認されており、それらは大小路地区で主に出土していることから、施釉陶磁器の使用地点が城内中央・東側の大畑地区から城内南側・城外南側の大小路地区へ移動していることが想定される。

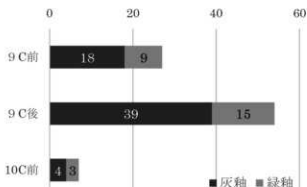
いずれも遺構外からの出土が大半を占めるが、遺構内からの出土は廃棄土坑等、遺構廃絶時に混入したと考えられる出土状況が多く見られ、儀礼的に設置された形跡など特徴的な出土状況を示すものがない。使用から廃棄までの時期差が無いことが考えられる。これら出土地点の傾向や出土状況から、施釉陶磁器が建物の廃絶と共に廃棄されていたことから、廃棄するという行為自体に儀礼的な意味が含まれていたことが指摘される。



第1図 秋田城跡における施釉陶磁器の出土状況



第1表 施釉陶磁器出土点数割合



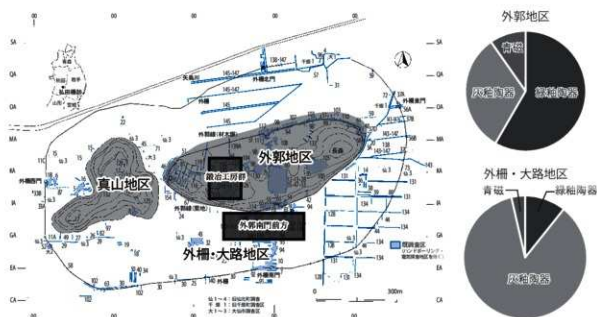
第2表 灰軸・緑釉陶器時期ごとの点数

2. 払田柵跡

秋田県大仙市払田および仙北郡美郷町本堂城回に所在する払田柵跡は、9世紀初頭に創建され、10世紀後半まで機能した古代城柵である。遺跡は長森と真山を取り囲む外柵、長森のみを取り囲む外郭線、そして政庁の三つの囲いによって区画される。今回の報告では外郭線内を外郭地区、外柵内の沖積地を外柵・大路地区とした。

払田柵跡で出土した施釉陶磁器は、緑釉陶器 45 点、灰軸陶器 47 点、越州窯系青磁 8 点の合計 100 点（同一個体を含む）である。各器種・産地・時期は第3～5表の通りである。施釉陶磁器の出土状況を見ると、緑釉陶器と青磁は外郭地区の鍛冶工房群周辺（119・120・122・135 次）、灰軸陶器は鍛冶工房群周辺に加えて、外柵・大路地区外郭南門前方（94・148・150 次）で出土破片数が多い傾向にある。

鍛冶工房群周辺は段状に整地され、標高に応じて遺構配置が異なっており、施釉陶磁器は9世紀中頃～10



第2図 松田柵跡地区区分図と出土比率（秋田県教育委員会 2021に加筆）

第3表 器種

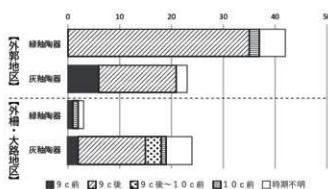
【緑釉陶器】					【灰釉陶器】						
	地区	外郭地区	外柵・大路地区	合計		地区	外郭地区	外柵・大路地区	合計		
	器種	破片数	割合			器種	破片数	割合			
埴輪	埴輪花柄	7	1	17.8%	埴輪	埴輪	5	11	16	34%	
	埴輪花柄	2	0	2		4.4%	皿類	2	2	4	9%
	埴輪	2	0	2		4.4%	皿類	0	2	2	4%
皿類	皿	10	0	10	22.2%	皿類	皿	1	0	1	2%
	散皿	4	0	4	8.9%		散皿	9	3	12	26%
	破皿	2	0	2	4.4%		破皿	3	5	8	17%
	耳皿	1	0	1	2.2%		手付皿	1	0	1	2%
	煎鍋	6	0	6	13.3%		煎鍋	1	0	1	2%
甕類	甕	1	0	1	2.2%	甕類	甕	1	0	1	2%
	甕	1	0	1	2.2%		甕	0	1	1	2%
	甕	6	2	8	17.8%		甕	0	0	0	0%
合計	42	3	45	100.0%	合計	23	24	47	100%		

第4表 産地

【緑釉陶器】					【灰釉陶器】				
地区	外郭地区	外柵・大路地区	合 計		地区	外郭地区	外柵・大路地区	合 計	
			破片数	割合				破片数	割合
産地					産地				
雄投	22	1	23	51.1%	雄投	13	5	18	38.3%
東遼	1	0	1	2.2%	雄投?	0	2	2	4.3%
東遼?	1	0	1	2.2%	東遼	2	13	15	31.9%
尾北	1	0	1	2.2%	東遼?	0	4	4	8.5%
東海	2	1	3	6.7%	尾北	6	0	6	12.8%
東海?	5	0	5	11.1%	産地不明	2	0	2	4.3%
洛北?	1	0	1	2.2%	合計	23	24	47	100.0%
洛西	5	0	5	11.1%					
畿内	4	0	4	8.9%					
産地不明	0	1	1	2.2%					
合計	42	3	45	100.0%					

第5表 時期

【緑釉陶器】				【灰釉陶器】			
地区 時期	外郭地区	外柵・大路地区	合計	地区 時期	外郭地区	外柵・大路地区	合計
9世紀前半	0	1	1	9世紀前半	6	2	8
9世紀後半	39	0	39	9世紀後半	15	13	28
10世紀前半	2	1	3	9世紀後半～10世紀前半	0	3	3
10世紀後半	0	0	0	10世紀前半	0	1	1
時期不明	5	1	6	10世紀後半	0	0	0
合計	42	3	45	時期不明	2	5	7
				合計	23	24	47



第3図 時期別出土点数

世紀前半に重複して構築された鍛冶工房が位置する北側斜面中位～上位緩斜面で出土する。地鎮などの意図的な埋納には用いられず、工房周辺から小片で出土するため、概ねに祭祀と関連付けて考えることは難しい。一方、その他の地点からはほとんど出土しないため、鍛冶工房群と密接に関連した使用・廃棄が想定される。

外郭南門前方は、9世紀初頭には政庁正殿に次ぐ規模の建物が存在し、10世紀初頭の盛土整地による広場造成と建物移転を経て、10世紀代も利用された。「調米」木簡や「厨」墨書土器の存在から養給のための広場と理解される地区である。

以上のように、私田柵跡では緑釉陶器・青磁と灰釉陶器の出土分布に違いがあることが確認された。灰釉陶器は鍛冶工房群でも出土するが、養給の広場とされる外郭南門前方での出土も目立つため、緑釉陶器・青磁とは異なる使い方がされていた可能性も考えられる。

3. 出羽北部の様相

県内の出土状況をみると、施釉陶磁器の出土が集中する秋田城跡周辺、私田柵跡周辺、由利本荘市内越地区、にかほ市両前寺地区、点的な分布状況の秋田城跡以北に大きく分けられる。

秋田城跡周辺では、秋田城跡以外の遺跡からはほとんど施釉陶磁器が出土せず、施釉陶磁器を用いるような場が秋田城跡に集約されていた可能性も考えられる。

第6表 県内出土施釉陶磁器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	緑釉	灰釉	白磁	青磁
1	サトリ台	能代市外見巻字サトリ台			1	
2	鴨巻Ⅰ・Ⅱ	能代市田内字鴨巻	6			
3	上ノ山Ⅱ	能代市河内字上の山	3			
4	小林	山本郡三種町舞川字小林		1		1
5	小谷地	男鹿市船本富永字小谷地		1		
6	地蔵店	北秋田市森吉字地蔵店		1		
7	久保田城	秋田市千秋町徳町	1			
8	虚空蔵大台	秋田市河辺豊成字虚空蔵大台		1		
9	小島田Ⅰ	大仙市豊見内水上	2	2		
10	厨川谷地	大仙市私田・仙北郡美郷町本堂城Ⅱ	5	1		
11	内村	仙北郡美郷町千屋字内村	2			1
12	本堂城	仙北郡美郷町本堂城田字館間		1		
13	川端山田	仙北郡美郷町金沢東根字川端山	1			
14	大坪	由利本荘市塩谷字大坪		1		
15	樋ノ口	由利本荘市塩山字樋ノ口		3		
16	樋田	由利本荘市西目町戸手樋田		1		
17	立沢	にかほ市平沢字立沢	2			1
18	前田表Ⅱ	にかほ市南前寺字前田表	1			
19	家ノ浦	にかほ市南前寺字家ノ浦		1		
20	家ノ浦Ⅱ	にかほ市南前寺字家ノ浦	24	13	5	
21	行ヒ森	にかほ市平沢字行ヒ森	1			
合計			48	27	6	3

虚空蔵大台滝遺跡出土の灰釉陶器は11世紀代で、秋田城跡と直接的な関連はないとみられる。

私田柵跡周辺では、私田柵跡の祭祀場とされる厨川谷地遺跡、須恵器窯の存在が示唆される川端山田遺跡など周辺遺跡からの出土も多い。いずれも私田柵跡との関連が推測され、私田柵跡を中心に施釉陶磁器が拡散したと考えられる。

由利本荘市とにかほ市は城柵官衙遺跡が未確認の地域であるが、内越地区周辺には由利柵擬定地が存在し、両前寺地区では古代の官道が確認されるなど官衙関連遺跡の存在が示唆される。両前寺地区の家ノ浦Ⅱ遺跡では、木辺を中心とした施釉陶磁器廃絶儀礼が行われた可能性が指摘される。

秋田城跡以北では、まとまった量が流通していたとは考えにくい。出土遺跡では鉄生産関連施設の存在が目立ち、律令祭祀関連遺物の出土も確認される。

おわりに

秋田城跡・私田柵跡ともに鍛冶・漆工房などの生産施設が存在する地区に出土が集中し、地鎮などの意図的な埋納行為には用いられないという共通点が見出された。一方、これらの地区では秋田城跡は灰釉陶器、私田柵跡は緑釉陶器の比率が高いという相違点がある。県内全域をみても、施釉陶磁器は官衙関連遺跡から出土する傾向にあり、令和4年度の城柵官衙遺跡検討会での報告は村田の論考を追認する形となった。

引用・参考文献

- 村田淳 2012「東北地方出土の平安時代施釉陶磁器集成 1. 青森県・秋田県」『紀要XXXⅠ』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田淳 2013「東北地方出土の平安時代施釉陶磁器（2）—青森県・秋田県における出土状況の整理—」『紀要XXXⅡ』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田淳 2016「東北地方北部の施釉陶磁器」『日本考古学協会 2016年度弘前大会第Ⅱ分科会 北東北9・10世紀社会の変動』研究報告資料集 日本考古学協会 2016年度弘前大会実行委員会
- 村田淳 2017「東北地方北部出土の施釉陶磁器—城柵遺跡における性格の検討—」『紀要第36号』公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

列島北端部の様相

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 村田 淳

はじめに

本稿では、城柵未設置地域である列島北端部を対象とするが、報告2「陸奥国北部の様相」で記載した通り、岩手県内陸北部（盛岡市以北）では施釉陶磁器の出土が確認されていないことから、ここでは岩手県沿岸部及び青森県域の様相について記載する。なお、時期区分は報告2と同じく9世紀前半をA期、9世紀後半をB期、10世紀前半をC期、10世紀後半～11世紀をD期とする。

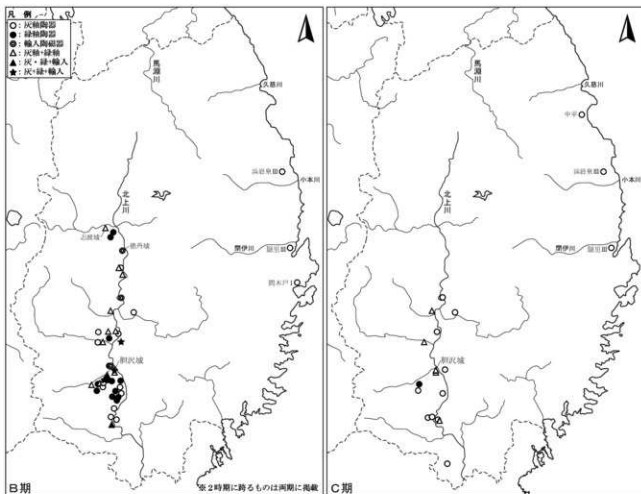
1. 岩手県沿岸部の様相

岩手県で施釉陶磁器が出土した68遺跡のうち、沿岸部には4遺跡が分布する（第1図）。遺跡の分布は散在的で、九戸郡で1遺跡（野田村中平遺跡）、

閉伊郡で3遺跡（田野畑村浜岩泉Ⅲ遺跡・宮古市隠里Ⅲ遺跡・山田町間木戸Ⅰ遺跡）である。

施釉陶磁器は全て灰釉陶器で、隠里Ⅲ遺跡のみ複数個体が出土しているが、完形に復元できるものは無い。器種は、間木戸Ⅰ遺跡が埴、その他は瓶類である。いずれもB～C期の製品で、浜岩泉Ⅲ遺跡のみ東農窯産、その他は狼投窯産である。北に位置する遺跡ほど時期が新しい傾向がある。

出土遺跡は全て集落遺跡で、工房や鍛冶炉といった金属生産関連遺構が多数検出される鍛冶関連の集落と考えられる。主な遺跡内出土遺物の相伴関係は、武器・農工具・金属生産関連遺物（羽口・鉄滓）が4遺跡（以下「遺跡」省略）、製塩関連遺物（製塩



第1図 岩手県沿岸部時期別出土遺跡分布図

隠里Ⅲ遺跡（宮古市）1号火葬関連施設



第2図 岩手県沿岸部の遺構内出土事例

土器・土製支脚）3、馬具・石帯・錫杖状鉄製品（鉄鐸）各1である。内陸部と異なり文字関連遺物との共伴は無いが、製塩関連遺物の共伴率が高い。なお、中平遺跡では律令系遺物（石帯）と北方系遺物（鉄鐸）が共伴しており、これは内陸部の鍛冶関連集落である奥州市明神下遺跡と共通する特徴である。

出土遺構は、堅穴建物物が3遺跡4軒と最も多い。堅穴建物は一辺6m以上と遺跡内でも規模が大きく、鍛冶炉や金属生産関連遺物が検出され工房と想定されるものである。

この他、岩手県全体でも特殊な出土事例として隠里Ⅲ遺跡1号火葬関連施設が挙げられる（第2図）。骨片は未検出であるが床面と壁面に木材を設置した火葬関連の施設であり、炭化材の年代測定結果からD期前半の遺構と考えられる。堆積土中～下位の炭化材直上から副葬品と考えられる二次被熱した灰軸

陶器長頸瓶が出土しているが、B-C期の製品で、年代測定結果とは時期差がある。

2. 青森県の様子

16遺跡で施釉陶磁器の出土が確認されている（第1表）。津軽平野、浪岡地域、上北地域、八戸市域に分布し、特に八戸市域に集中する。種別ごとの遺跡数は、緑釉陶器6、灰軸陶器7、輸入陶磁器4である。青森市新田（1）遺跡のみ複数種別が出土しているが、緑釉陶器と灰軸陶器で年代が異なる。複数個体が出土したのは新田（1）遺跡と三沢市平畑（1）遺跡、八戸市八幡遺跡の3遺跡で、その他は1個体分の破片が出土している。

出土遺跡は全て集落遺跡で、周辺の遺跡と比べて堅穴建物の検出数が多い傾向がある。岩手県沿岸部と同じく鍛冶関連の集落が多く、野辺地町二十平（1）遺跡や八戸市林ノ前遺跡など環濠を有するいわゆる防御性集落からも出土している。主な遺跡内出土遺物の共伴関係は、農具11、金属生産関連遺物（鉄滓・羽口・埴埴）10、武器・武具9、文字関連遺物（墨書土器・硯）6、錫杖状鉄製品（鉄鐸）4、製塩関連遺物（製塩土器）・擦文土器・鉄鈴各2等である。岩手県と同じく文字関連・金属生産関連遺物との共伴率が高いが、秋田県北部と同じく北方系遺物（鉄鐸・擦文土器）との共伴率も高い。

出土遺構は、堅穴建物が10遺跡12軒と最も多い。堅穴建物内ではカマドや土坑といった床面施設からの出土もあるが、堆積土中からの出土も多く、当時の使用状況は不明である（第3図）。

No.	遺跡名	性格	所在地	遺構・点数	産地・時期	出土遺構	特記事項	文献
1	新田(1)	集落	青森市	緑釉 陶花皿1 灰軸 埴1	東遼 B-C期? 東遼 D期前半	溝・遺構外		青森市数寄107集
2	上野	集落	青森市	緑釉 埴1	東遼 D期	堅穴建物	研磨陶片として二次利用	青森市数寄466集
3	沢部(1)	集落	弘前市	青釉 皿1	緑釉 A-B期	溝	大宰府1期、溝は10世紀後半	青森市数寄593集
4	高部	集落	東港市	白磁 硯1	不明 D期	堅穴建物		青森市数寄403集
5	田代半城(2)	集落	平川市	灰軸 小埴1	東遼 C期	土坑		平野町数寄17集
6	二十平(1)	集落	上北郡野辺地町	緑釉 埴1	近江 C期	堅穴建物		野辺地町灰軸青釉硯15集
7	数ヶ	集落	上北郡穴内村	灰軸 埴1	不明	遺構外		青森市数寄160集
8	沖副(1)	集落	上北郡穴内村	灰軸 皿1	緑釉 B-C期	堅穴建物	転用硯として二次利用	青森市数寄100集
9	早瀬(1)	集落	三沢市平畑	緑釉 緑皿1・埴1・α・皿1・耳皿1	雄略 C期	堅穴建物・遺構外	研磨片数17点、遺構間接合	青森市数寄2010集
10	中野平	集落	上北郡おいらせ町	緑釉 緑形硯埴1	緑釉 B期	堅穴建物		おいらせ町数寄15集
11	林ノ前	集落	八戸市	白磁 皿4	緑釉 B期	遺構外	短頸瓶か	青森市数寄415集
12	大仏	集落	八戸市	白磁 皿1	不明 D期	堅穴建物	大宰府2期	八戸市数寄94集
13	新野堂	集落	八戸市	緑釉 埴1	近江 C期	堅穴建物		八戸市数寄160集
14	田島木	集落	八戸市	灰軸 皿1	東遼 B-C期	堅穴建物	研磨陶片として二次利用	八戸市数寄174集
15	八幡	集落	八戸市	灰軸 短頸瓶1・白耳皿1・皿1	緑釉 D期前半 東遼 不明	堅穴建物・遺構外	白耳皿は詳細な年代・年代不明	八戸市数寄158集
16	中野(2)	集落	八戸市	白磁 硯1	不明 D期	遺構外	大宰府2期	八戸市数寄174集

※1:「○・□」は各時期に比定できるもの、「○・□」は二つの時期に跨るもの

※2: D期のうち、前半は10世紀後半、後半は11世紀代

第1表 青森県施釉陶磁器出土遺跡一覧

時期別の分布をみると〈第4図〉、A-B期は1遺跡のみであるが、B期に八戸市域、B-C期には津軽平野や上北地域まで分布域が拡がり、この時期には灰釉陶器が主体となる。続くC期には遺跡数が増加し、緑釉陶器主体へと変化する。D期には上北地域での出土は確認されなくなり、東農窯産の国産陶器と白磁のみとなる。なお、B期の灰釉陶器が出土した林ノ前遺跡はD期を主体とする遺跡で、B期の遺構・遺物は検出されていない。また、A-B期の青磁が出土した沢部(1)遺跡もD期が主体で、主体となる時期より古い時期の製品が出土する遺跡が確認されている。

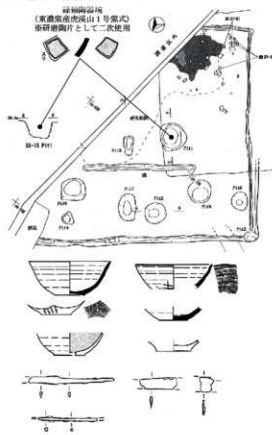
器種と産地についてみていく〈第5図〉。器種は、緑釉陶器は埴・皿類のみで、産地は猿投窯・東農窯・篠窯・近江産である。灰釉陶器は埴・皿類と壺類があり、産地は猿投窯と東濃窯である。特殊器種として、緑釉陶器ではおいらせ町中野平遺跡の緑彩椀埴、灰釉陶器では八幡遺跡の四耳壺や短頸壺がある。輪

入陶磁器は、沢部(1)遺跡の越州窯系青磁皿Ⅰ類、八戸市大仏遺跡の白磁皿Ⅺ類等がある。なお、六ヶ所村沖附(1)遺跡では灰釉陶器皿を転用硯、青森市上野遺跡や八戸市熊野堂遺跡では破片を「研磨陶片」として二次利用している〈第3図〉。

おわりに

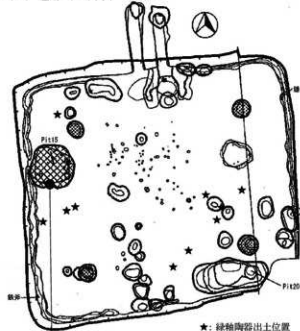
列島北端部では、施釉陶磁器はB-C期以降の鍛冶関連の集落で出土する傾向があり、城柵でも施釉陶磁器の出土量が激減するC期に遺跡数が増加する。ただし、出土量は各遺跡1～数点程度であり、遺跡の分布も散在的であることから、B期までの城柵のような拠点遺跡を介してではなく集落・地域ごとに入手していたと考えられる。なお、当地域への流通経路は、陸奥湾や青森県太平洋側で秋田県北部の米代川流域と同じく近江産緑釉陶器や白磁が出土していることから、単純に北上するだけではなく、地域の主要河川を利用した東西方向の経路も存在していたと考えられる。

上野遺跡(青森市) S1-15

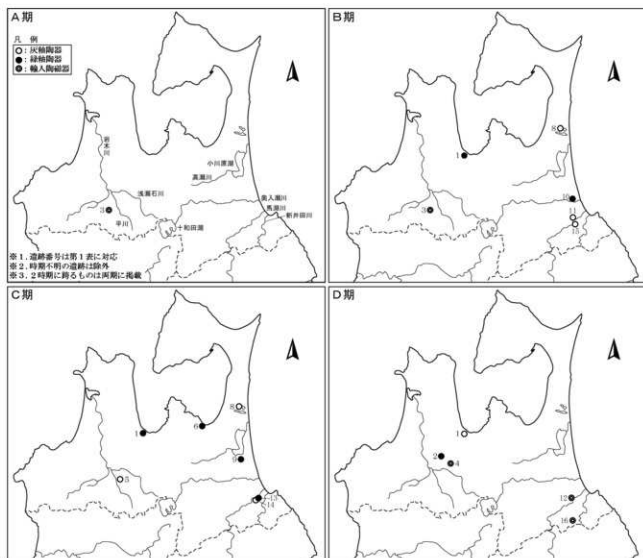


遺構 S=1/120
遺物 S=1/6
※上野遺跡緑釉陶器は1/4

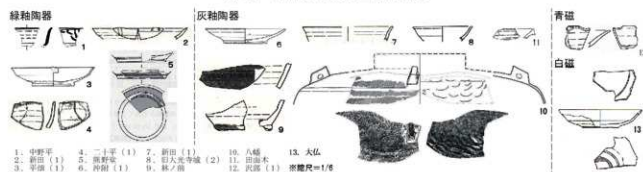
平畑(1)遺跡(三沢市) TR38HP



第3図 青森県の遺構内出土事例



第4図 青森県時期別出土遺跡分布図



第5図 青森県出土施釉陶磁器の諸例

参考文献

- 高橋照彦 2018 「東北地方北部出土の緑軸陶器とその歴史的背景」
『尾駱の駒・牧の背景を探る』六一書房
- 高橋照彦・長尾正義 2010 「三沢市平畑 (1) 遺跡から出土した
緑軸陶器について」『研究紀要』第15号
青森県埋蔵文化財調査センター
- 村田 淳 2012・2013 「東北地方北部出土の平安時代施釉陶磁器
集成 (1)・(2)」『紀要XXXI』・『紀要XXXII』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 村田 淳 2016 「東北地方北部の施釉陶磁器」『第II分科会
北東北9・10世紀社会の変動 研究報告資料集』
日本考古学協会 2016 年度弘前大会実行委員会

山王遺跡千刈田地区出土 施釉陶磁器の概要

多賀城市埋蔵文化財調査センター 小原 駿平

はじめに

多賀城南面に広がる方格地割のうち、北1西7区では、山王遺跡第9次調査（平成2年度・調査面積：約740 m²、多賀城市教育委員会1991）及び同第18次調査（平成4年度・調査面積：200 m²、多賀城市教育委員会1993）を実施している。同区画は、上記の調査において、四面廂付建物S B474を主殿とする掘立柱建物群を発見したほか、豊富な施釉陶磁器や「右大臣殿饒馬収文」題箋軸木簡（令和6年度国指定重要文化財「多賀城関連遺跡群出土木簡」）が出土したこと等により、平成5年度に特別史跡多賀城跡附寺跡に追加指定されている（「山王遺跡千刈田地区」）。

出土した施釉陶磁器については、概要報告書において一部の実測図を示したほか、宮城県教育委員会（1996）に出土数データを提供した経緯があり、古代土器・施釉陶器の研究史上（尾野 2002・高橋 2016 等）において、緑釉陶器の出土が多い地区として評価されてきたものの、詳細については未提示となっていた。

本稿では現状の資料整理に基づき、改めて施釉陶磁器の概要を報告する。

1. 遺跡の概要

(1) 方格地割の概要

方格地割は、東西大路・南北大路二つの幹線道路を基準とした道路網によって、およそ120m四方の区画に造成されたものである。山王遺跡から近接する市川橋遺跡にかけて、多賀城と密接に関連する都市空間を形成している。

このうち東西大路の沿線区画に国司等の上級役人が、離れた区画に下級役人が住まいを構えたと考えられており、施釉陶磁器の多寡はその反映とされてきた。

道路名は東西大路から数えて南にx番目の東西道路を南x道路、南北大路から数えて西にy番目の南北道路を西y道路のように表記する。街区の名称についても同様に、東西大路から数えて南にx番目・南北大路から数えて西にy番目の区画を南x西y区のように表

記する（第1図）。

方格地割の変遷については、鈴木（2006）・武田（2010）・宮城県教育委員会（2018）等のほか、近年の発掘調査に基づく変遷案（多賀城市教育委員会 2023）がある。変遷上の画期や、その歴史的背景等について、論者により細部に異同はあるものの、ここでは最後者の変遷案を以下に示す。

多賀城政庁中軸線上における南北大路敷設の後、8世紀後半～末頃には東西大路の敷設・南北大路の拡張・河川を直線的に改修した運河の造成が行われ、8世紀末～9世紀前葉頃には東西南北の小路の整備により方格地割が成立し、9世紀中葉～10世紀前葉頃には街区が拡大、縁辺部においても道路が敷設され、方格地割の範囲は最大となる。

その後10世紀後葉～11世紀前葉頃までの間に、各道路は維持されなくなり、方格地割は廃絶に至る。

(2) 北1西7区の概要

東西大路から数えて北に1番目・南北大路から数えて西に7番目の区画である（第1・3図）。

遺構期はA・B2時期に大別され、それぞれ2小期に分けられる。特に注目されるのが、B1期（10世紀前葉頃）の遺構群である。

四面廂付建物S B474のほか、割り抜き材を用いた井戸跡S E504や、宴会儀礼等に伴う土器の一括廃棄遺構S X543が構築される。

S B474は4時期（a～d）の変遷を確認しており、このうちc期掘方埋土に灰白色火山灰（To-a）が混入する。（※）

また、c期掘方埋土から、前述の「右大臣殿饒馬収文」題箋軸木簡が出土しており、同a～b期のいずれかの時期より、饒馬に関する一連の文書が保管されていたと考えられる。

※一当市では灰白色火山灰（To-a）について、私田穂跡外郭線の伐採年代や館

原国分寺七重塔の焼土層との層位関係から907～934年の間とする考え（宮城県多賀城跡調査研究所1998）に従い、10世紀前葉と捉えている。

2. 北1西7区 施釉陶磁器概要

(1) 組成 (第1表)

北1西7区では、第9次調査及び第18次調査で、破片総数306点が出土している。

緑釉陶器は83点出土している(第9次:69点・第18次:14点)。

器種組成の大部分を占めるのが埴(68点、81.9%)であり、他に皿、三足盤、段皿、稜埴、耳皿等があるが、いずれも破片数1~4点程度である。

底部が残存する埴・皿類では大部分が東海西部・尾張産(貼付高台)とみられるが、一部に畿内産(削出高台、第2図-1等)が含まれる。

灰釉陶器は214点出土している(第9次:195点・第18次:19点)。

器種組成の大部分を占めるのが埴(184点、86%)であり、瓶類や段皿、手付瓶、耳皿等を一定量(2~8点)含む。底部が残存する埴・皿では、大部分が東海西部・尾張産とみられるが、東濃産が2割程度含まれる。

青磁は4点出土している(第9次:4点)。第2図-10は水注である。胴部は瓜形に整形されており、軸下に白色の化粧土が施されている。

白磁は4点出土している(第9次:4点)。器種はいずれも碗で、玉縁口縁のものが含まれる。

褐釉陶器は1点出土している(第9次:1点)。瓶類の口縁部とみられる(第2図-3)

(2) 出土状況及び所見(第2表・第3図)

出土した施釉陶磁器の大部分が、調査区内基本層からのものであり、そのうちB期建物造成時の整地層(第4層)出土のものが10点、B期の遺構を覆う第3層のものが112点である。

遺構からの出土数は、掘立柱建物に伴う柱穴からのものが多い。建物配置や規模から北1西7区の主殿とみられる四面廂付建物S B474では、緑釉陶器の出土量が灰釉陶器の出土量を上回る。

また、最上層に灰白色火山灰(To-a)が自然堆積する土坑SK501で26点の灰釉陶器が出土している。

その他、青磁水注(第2図-10)は、宴会儀礼に伴う土器の一括廃棄遺構SX543から出土している。

調査面積100㎡あたりの出土数は32.55点(内緑釉陶器8.8点、灰釉陶器22.8点)である。山王遺跡多賀前地区における100㎡あたりの出土数と比較すると、北1西3区で4.19点、南1西2区で9.05点、南2西1区で0.23点であり(宮城県多賀城跡調査研究所2020)、方格地割内においても突出した出土量であることが分かる。

また、総数306点に対して緑釉陶器の割合は約27.1%を占めている。20%以上を占める遺跡は国府やその関連遺跡に多いことが指摘されており(高橋1994)、区画内の性格を反映したものと考えられる。

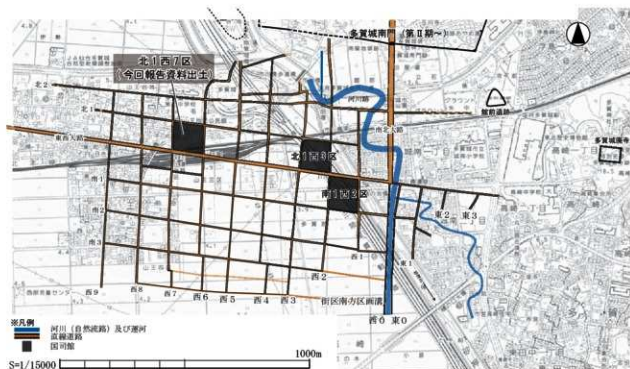
おわりに

今回の報告では、多賀城市埋蔵文化財調査センターによる過年度調査資料再整理に基づき、北1西7区における施釉陶磁器の器種・出土量・出土状況についての概要を示した。

産地・時期等の詳細な検討については、今後の課題である。

引用・参考文献

- 尾野善裕 2002『平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費』『国立歴史民俗博物館研究報告』第92集 pp.35-57
- 鈴木孝行 2006『多賀城の方格地割』『第32回城壕官衙遺跡検討会資料集』pp.86-97
- 高橋照彦 1994『東国の施釉陶器』『古代の土器研究—施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム pp.19-26
- 高橋照彦 2016『都と地方の土器』『官衙・集落と土器1』第18回古代官衙・集落研究会報告書 pp.11-26
- 多賀城市教育委員会 1991『山王遺跡—第9次発掘調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第26集
- 多賀城市教育委員会 1993『山王千利田遺跡—関連調査報告書—』多賀城市文化財調査報告書第34集
- 多賀城市教育委員会 2023『多賀城地区ほ場整備事業に係る発掘調査報告書』多賀城市文化財調査報告書第157集
- 武田健市 2010『多賀城廃寺と多賀城南面の様子』『第36回城壕官衙遺跡検討会資料集』pp.115-134
- 宮城県教育委員会 1996『山王遺跡Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第171集
- 宮城県教育委員会 2018『山王遺跡Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第246集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1998『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1997』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 2020『多賀城施釉陶磁器』



第1図 多賀城南面の方格地割と北1西7区

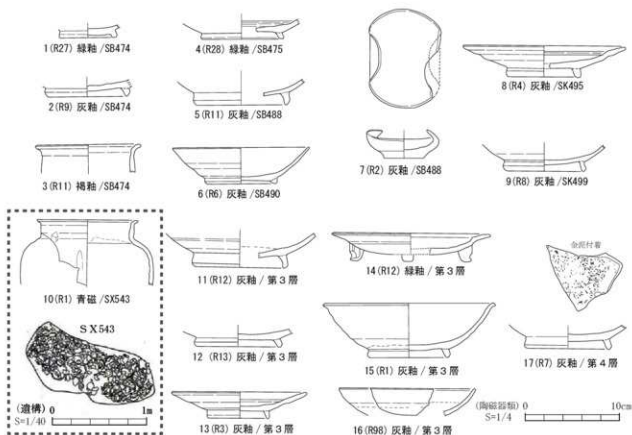
第1表 北1西7区 施軸陶磁器 器種別集計表

種類	緑釉陶器		灰釉陶器		青磁	白磁	褐釉	合計
	点数	割合 (%)	点数	割合 (%)	点数	点数	点数	点数
壺・碗	68	81.9	184	86	3	4	-	259
皿	3	3.6	3	1.4	-	-	-	6
段皿	1	1.2	8	3.7	-	-	-	9
三足盤	4	4.8	-	-	-	-	-	4
長頸瓶	-	-	3	1.4	-	-	-	3
小瓶	1	1.2	1	0.5	-	-	-	2
瓶	-	-	10	4.1	-	-	1	11
手付瓶	-	-	2	0.9	-	-	-	2
壺	-	-	-	-	-	-	-	0
耳皿	1	1.2	2	0.9	-	-	-	3
水注	-	-	-	-	1	-	-	1
その他	5	6	1	0.5	-	-	-	6
合計	83		214		4	4	1	306

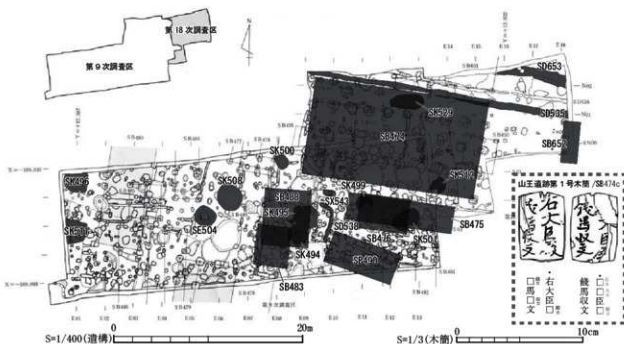
第2表 北1西7区 施軸陶磁器 出土遺構別集計表

掘立柱 建物跡	SB474	31	埴19, 灰10, 埴1, 白1	土坑	SK208	1	灰1	溝跡	SD535	1	灰1
	SB475	2	埴1, 灰1		SK494	2	灰2		SD538	2	灰2
	SB476	1	灰1		SK495	5	埴2, 灰3		SD653	2	灰2
	SB483	1	埴1		SK496	4	灰4		計	5	灰5
	SB488	1	灰1		SK499	8	灰8	基本層	第1層	13	埴8, 灰5
	SB490	2	埴1, 灰1		SK500	1	灰1		第2層	44	埴17, 灰27
	SB652	1	青1		SK501	26	灰26		第3層	112	埴24, 灰84, 青2, 白2
井戸跡	SE504	3	埴1, 灰2	計	SK508	1	灰1		第4層	10	灰10
	計	3	埴19, 灰24, 青1, 白2, 埴1		SK511	1	灰1	その他	遺構	2	埴1, 灰1
総計	計	306			SK512	10	埴4, 灰6		不明	2	灰2
					SK529	1	灰1		計	4	埴1, 灰3
					SK543	1	青1				

緑…緑釉陶器 灰…灰釉陶器 青…青磁 白…白磁 褐…褐釉陶器



第2図 北1西7区出土の施釉陶磁器



第3図 北1西7区における施釉陶磁器出土遺構

研究集会「古代東北出土の施釉陶磁器」発表要旨

主 催	東北古代土器研究会
共 催	東北大学埋蔵文化財調査室
発 行 日	2025 年 8 月 30 日
編集発行	東北古代土器研究会 事務局

※デジタル化にあたり、表紙及び体裁の一部を修正しました。